

令和元年度(2019)

和歌山県立医科大学
地域医療センター

夏季研修 報告書



令和元年度

和歌山県立医科大学
地域医療支援センター

夏 季 研 修
報 告 書



CONTENTS

●ご挨拶.....	2
●実施要項.....	3
病院・診療所研修.....	4
県外研修.....	37
保健所研修.....	51
その他.....	85

ご挨拶

和歌山県立医科大学地域医療支援センター センター長・教授
和歌山県地域医療支援センター センター長

上野 雅巳



平成 23 年度から実施している夏の病院研修につきましては、平成 25 年度から本学医学部地域医療枠学生と和歌山出身の自治医科大学医学部学生、また、平成 27 年度からは近畿大学医学部和歌山県地域医療枠学生の研修希望者と共に合同研修という形で行うことができ、ここにご報告できますことを大変嬉しく思います。

ご協力いただきました各病院・診療所、保健所、大学の先生方及びスタッフの方々、本学及び自治医科大学出身の先生方には厚く御礼申し上げます。

今年度も将来、本学医学部地域医療枠学生と同じ和歌山県の地域医療に携わる自治医科大学医学部学生、近畿大学医学部和歌山県地域医療枠学生とが、卒業後、勤務する予定の県内各病院・診療所や県外の大学・病院での研修を通して、地域医療の現状を知って理解を深めてもらうこと、学生たちが様々な手技を体験すること、また他大学・他学年との交流の場を設けることなどを目的として研修を実施しました。

本学医学部地域医療枠 3・4 年生と自治医科大学 1～5 年生は共に県内公的病院・診療所などで 2 日間の研修を行い、地域医療の実際の現場に触れることができました。本学医学部地域医療枠 5 年生は県外研修として、山口県の病院、自治医科大学附属病院さいたま医療センターなどで 2～3 日間の研修を行いました。本学 1・2 年生は、平成 29 年度から保健所にご協力を頂き、保健所で研修を実施しました。地域における保健所の役割や仕組みを学び、様々な視点から地域医療等について理解を深めることができましたと思います。また、近畿大学医学部和歌山県地域医療枠学生は昨年度同様、和歌山県立医科大学附属病院において、1 日間の研修を行いました。

研修中に実施した交流会を通して、学生間だけではなく、本学医学部地域医療枠出身の先生方との交流も深まりました。先輩方から貴重な話を聞くことにより、医師としての将来像が鮮明になったかと思えます。

このような研修や交流会を通して、学生たちが互いに刺激し合い、共に高め合い、本県の地域医療を担う立派な医師へと成長してくれることを心より願っています。

私たち地域医療支援センター教職員一同、今後も学生たちが安心して卒業後の勤務に臨めるよう、サポート体制などの環境作りに取り組んで参りたいと思います。

実施項目

●研修の目的

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠学生と和歌山県出身の自治医科大学医学部学生、近畿大学医学部和歌山県地域枠学生が、県内へき地や県外の医療現場で研修・見学を行い、地域医療の魅力や特性を理解し、地域医療に従事する医師の役割及び責任についての認識を深めることを目的とする。

●参加者

- ・和歌山県医科大学医学部地域医療枠学生 39名(1～5年生)
- ・自治医科大学医学部学生 10名(1～5年生)
- ・近畿大学医学部和歌山県地域枠学生 1名(1年生)

●日程

保健所研修

令和元年7月22日(月)～26日(金)

病院・診療所研修

令和元年8月15日(木)～16日(金)、19日(月)～20日(火)、22日(木)～23日(金)

県外研修

令和元年8月22日(木)～24日(土)、26日(月)～28日(水)、28日(水)～29日(木)

研修先病院・診療所

< 病院・診療所研修 >

令和元年8月15日(木)～16日(金)、19日(月)～20日(火)、22日(木)～23日(金)の間、地域医療枠3・4年生と自治医科大学、近畿大学学生が12グループに分かれ、各病院・診療所で研修を行いました。



参加者名簿

●病院・診療所研修

和歌山県立医科大学医学部 地域医療枠

研修先	学年	氏名
野上厚生総合病院	4年生	長沖柊一朗
	4年生	西平 大輝
国吉・長谷毛原診療所	3年生	貴田 理香
有田市立病院	4年生	東 丈
	4年生	出崎 祐気
	3年生	荒木 彩加
川上・寒川診療所	3年生	泉 裕太
	3年生	高橋 翠

研修先	学年	氏名
白浜はまゆう病院	3年生	松本 和樹
国保すさみ病院	3年生	野久保翔太
	3年生	山本 宗汰
那智勝浦町立温泉病院	4年生	森下 晃
	3年生	小西 朋樹
新宮市立医療センター	3年生	谷地 晃

自治医科大学医学部

研修先	学年	氏名
高野山総合診療所	1年生	宮本 理
	1年生	吉井 稜真
野上厚生総合病院	2年生	武内 廉
国吉・長谷毛原診療所	5年生	園田 健留
有田市立病院	3年生	山崎 博貴

研修先	学年	氏名
川上・寒川診療所	5年生	玉井 里奈
白浜はまゆう病院	4年生	中尾 光
国保すさみ病院	5年生	岡本恵里花
那智勝浦町立温泉病院	4年生	額田 洋平
国保北山村診療所	3年生	西岡 秀悟

近畿大学医学部

研修先	学年	氏名
和歌山県立医科大学附属病院	1年生	若森 千怜



1 野上厚生総合病院



位置 和歌山県海草郡紀美野町小畑 198 番地

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠 4 年生

長沖 柊一朗

1. 研修施設とその地域の概要

国保野上厚生総合病院は、昭和 24 年に設立され、昭和 53 年 4 月「へき地中核病院」として指定を受けた。病床数は一般病床 100 床（うち地域包括ケア病床 57 床）、療養病床 54 床、精神病床 100 床であり、診療科目は内科、外科、整形外科、婦人科、神経精神科、眼科、耳鼻咽喉科、泌尿器科、脳神経外科がある。診療圏は、紀美野町と海南市が中心であり、山が連なり高齢者の方が自力で病院に行くのが困難な地区もあるため、診療圏内の 4 か所の診療所への医師、看護師、薬剤師を派遣や、訪問看護やケアマネージャーによる居宅介護支援も行っている。患者は高齢者が多く、70 代 80 代が主であり、90 代の方も外来に来られている。CT や MRI

などの医療機器は、平成 10 年の本館竣工に伴い、順次買い換えたもので、最新のものが多く、建物も比較的新しい印象だった。

国保野上厚生総合病院の主な診療圏である紀美野町は、北に和歌山市と紀の川市、南には長峰山脈が東西に走り有田郡に、東は伊都郡、高野山にそれぞれ隣接し、西は紀伊水道をはさんで徳島県と向かい合っている。気候は温暖で、自然豊かな地域である。紀美野町は和歌山保健医療圏に属しており、人口 9,237 人、世帯数 4,355 世帯（平成 29 年 6 月末現在）であり、町の高齢化率は和歌山県内の市町村の中でも高い方で、38.9% となっている。

2. 研修内容

1 日目は、病院の施設を案内していただいた。外来は本館の 1 階と 2 階、入院病棟は本館 3 階から 5 階、東棟 2 階と 3 階に分かれていた。

まず、外来を案内していただいたのだが、外科外来では、軽い傷などの処置、内視鏡検査や消化器疾患の手術だけでなく、乳がん検診の実施も行ってた。内科外来では、消化器内科全般や高血圧・糖尿病・肺炎など日常的な病気について幅広く診察を行っており、特に消化器内科専門の医師が多く、内視鏡検査・治療を積極的に行い異常の早期発見・健康増進のため健診に力を入れている印象だった。他にも整形外科や眼科、脳神経外科、泌尿器科、耳鼻咽喉科、婦人科などがあり、常勤医師はいないものの和歌山県立医科大学と連携しながら診療を行っている様子であった。精神科の外来では、診察、入院だけでなく、訪問看護やデイケアなども行っており、特にデイケアは 20 歳代から高齢者まで、様々な年齢層の方々が利用されていた。

次に、病棟を案内していただいた。本館 3 階は急性期の病棟で、外科、整形外科、眼科の混合病棟であり、手術を受けられる患者だけでなく、化学療法や疼痛緩和などを目的とした患者も入院されていた。高齢者が多く、退院後の生活への支援も地域連携室と協議しながら行っているようだ。本館 4 階は急性期の内科病棟で地域包括ケア病棟として機能しており、本館 5 階は慢性期、リハビリ期の療養病棟で、窓からの景色もよく、ゆっくりと療養できる環境が整っている印象だった。東館の 2 階、3 階は主に精神科疾患慢性期の患者や認知症患者を対象とした精神一般病棟で、急性期の患者も受け入れている。高齢化に伴い、最近では身体的な合併症を抱えた方も多く入院しており、総合病院という特徴を生かして、身体的な疾患にも迅速に対応し、他科と連携を図りながら治療や看護を行っているようだ。

2 日目は、訪問看護を見学させていただいた。病院敷地内に訪問看護ステーションがあり、そこでは看護師の方達が絶えず情報共有をし、それぞれがどこの患者を訪問するのか、どういったケアを行うのか、などといったことを綿密に話されていた。私が訪問看護に同行させていただいた患者は高齢の男性で、夫婦で住んでおられる方だった。看護師の方は、体温や血圧の測定以外に、身体全体を濡れたタオルで拭いたり、口腔内洗浄を行ったりしていた。毎回、訪問看護の内容は違うようで、その時に何が必要か考えながら行っていた。患者だけでなく患者の

家族の方とも話しながら、気づいたことやその日の記録をノートに書き、他の看護師や医師、ヘルパーさんとの情報共有をしていた。訪問看護の見学はとても新鮮で、また、看護師の型と患者やその家族との間に強い信頼関係が築かれていると感じた。

3. 考察

二日間の研修を通して、特に野上厚生総合病院のようなへき地の病院では、患者との距離が近く、医師や看護師と患者やその家族との信頼関係が大事だと感じた。また、その信頼関係を築くためにはコミュニケーションが非常に重要だと改めて感じた。

また、野上厚生総合病院では精神病床が多く、精神科のための病棟が本棟と別に建っていたのが印象的であり、病床もほとんど常に満床であるということから、紀美野町のように高齢化が進んでいる地域では、精神科の必要性が高まっているということが伺えた。

4. 謝辞

最後になりましたが、今回私たち学生のために貴重な時間を割いて下さった野上厚生総合病院の方々、今回の研修を企画して下さいました地域医療支援センターの方々には厚く御礼申し上げます。貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠 4 年生

西平 大輝

1. 研修施設とその地域の概要

国保野上厚生総合病院は JR 海南駅から車で 20 分ほどの山あいであり、和歌山県内の他の僻地に比べると比較的アクセスしやすい。診療圏は紀美野町と海南市が中心で、紀美野町は町の中央に高野山を源にもつ貴志川が流れ、南部には高原がそびえる自然環境に恵まれた町である。町の高齢化率は和歌山県内の市町村の中でも高く、38.9% となっていて、そのため一人暮らしの高齢者が多く住んでいる。山が連なり高齢者の方が自力で病院に行くのが困難な地区もあるため、野上厚生総合病院では訪問看護やケアマネージャーによる居宅介護支援、さらに 4 か所の診療所に医師、看護師、薬剤師を派遣するなどしてへき地医療を支えている。野上厚生病院の病床数は、一般病床 100 床（うち地域包括ケア病床 57 床）、療養病床 54 床、精神病床 100 床であり、階によって期間の異なった入院環境が整えられていた。診療科目は、内科、外科、整形外科、婦人科、神経精神科、眼科、耳鼻咽喉科、泌尿器科、脳神経外科がある。平成 10 年に改築が行われ、CT や MRI などの医療機器は最新のものが多く、建物も綺麗な印象を受けた。

2. 研修内容

まず、病院についた後、事務局長から簡単なガイダンスをいただいた。その後、担当医師の方に病院を一周案内してもらった。外来から検査室、内視鏡室に入院病棟など見学させていただいた。そして、お昼ご飯を院長先生、担当医師の方といただき、野上厚生病院の現状、医療の進展、そして今後の医療について色々お話を聞くことができた。昼からは、病院周辺的环境やまた交通の便、診療科の不足などについて議論した。

次の日には、訪問看護に同行、見学させていただいた。細い山道を登っての訪問看護だった。

今回見学させていただいたのは、摘便が主だったが、その他いろんな手技を見ることができた。また、その中で看護師さんご家族の方がとても親しく会話しており、信頼関係の構築が重要だと思った。

3. 考察

まず、交通の便についてだが、海南駅からバスに乗り、病院に向かっていく途中の車窓で、どんどん建物が少なくなり、川を超えると一気に田舎感が増した。少なからず自分自身車で通ったことのある道ではあるが、いざ研修として向かうとなると感じ方は違い、ほんの少し山のほうに行くと一緒に地域医療の現実味を感じた。宿泊先に向かう道中でも非常に狭い道を通っており、もし救急車要請があったときや、それ以外でも病院に向かうのに非常に困難であると思った。

今回の研修を通して感じたことは、地域に深く根付いた医療であるということである。診療圏が狭いということもあり、会話の一つから始まり、外来の診察待ちでも患者さん同士が談笑しているなどいろんなところに地域性が感じられた。また、和歌山医大から近いということもあり、研修期間には出会えなかったが外来に来てしていると聞いて交通の便も地域医療の要なのだった。また、病院見学の際に感じたのが野上厚生総合病院では精神病床が多いということである。精神科のための病棟が本棟と別に建っており、こういった形式は他の病院で見たことがなく印象的で、近隣地域においても精神科の中核を担っていることがうかがえた。

二日目の訪問看護では非常に狭い山道を登っていく場所が多く、土地勘の必要を感じた。また、その現場では介護されている家族の方と会話を通して異常はなかったか、また普段の様子を、また異常はなかったかを判断されていた。家族の方への対応は、その方の性格などで変えることで、コミュニケーションする努力とともに長年培ってきた経験が活かされていると思った。本人、そして家族の方との信頼関係を築き、日常会話から様子を判断するのが地域医療の特徴なのかなと改めて思った。

4. 謝辞

最後になりましたが、この2日間私たちの研修を受け入れてくださった、野上厚生総合病院の柳岡院長先生、西事務局長、出口先生、看護師の方々をはじめとする野上厚生総合病院の皆様には深く感謝いたします。本当にありがとうございました。

2 国吉診療所



位置 和歌山県海草郡紀美野町
野田 63

3 長谷毛原診療所



位置 和歌山県海草郡紀美野町
毛原宮 254-4

和歌山県立医科大学医学部地域医療科 3 年生

貴田 理香

1. 研修施設とその地域の概要

病院の概要：国吉診療所、長谷毛原診療所ともに診療科は内科を中心に診療を行っている。一日に診療所を訪れる患者数は約 30 人前後であり、国吉診療所と長谷毛原診療所の比率はおよそ 1 : 2 である。基本的には診療所近辺に居住している地域の方、特に高齢者の方が多く、日常生活を送る中で生じた身体の不調や慢性的な症状が主であり、急患は時々あるが大学病院などのように直ちに命に関わるような患者は稀であるように見受けられた。また、診療所にかかる患者でも決まった薬を受け取るために訪れる人も多い。

地域の概要：国吉診療所、長谷毛原診療所はともに紀美野町（4238 世帯 8759 人（令和元年 8 月現在））の山間に位置しており、和歌山市、海南市も含む和歌山保健医療圏に属している。この和歌山保健医療圏の人口は県総人口の 44.1% を占めており、高齢化率は 30.2% となっている。本診療所の位置する所は、医療施設が集中する和歌山市からそう遠いわけではなく、また車で 30 分以内の距離に中核病院である国保野上厚生総合病院があるため、移動手段の確保ができる人や若い世代などはそちらを志向する傾向にあるようである。しかし、そうではない高齢者の方などにとって身近にある診療所の存在は日常生活を送るうえで欠かせないものとなっているのは確かである。

2. 研修内容

○ 1 日目

午前中は長谷毛原診療所にて、施設の設備見学、外来診察の見学、薬の一包化作業などをさせて頂いた。私は今まで診療所を訪れたことがなく、研修前は、診察室と最低限の薬剤しかないのではないかとイメージを持っていたが、診察室に加えレントゲン室や検査室があり、薬剤の種類も想像していたより多くあったので驚いた。外来診察では、定期的に診療所に通っている方はもちろん、この日初めて来所した方もいらっした。定期的に通っている方は状態などの情報があるため目的を絞って診察できる一方で、初めて来所した方に対しては、その方が訴えている症状には対してはもちろんだが、それ以外の健康状態の確認やどこに住んでいるか、普段どのように過ごしているか、どのような家族構成、人間関係があるかなどより多くの情報を診察の中で聞き出し、その人がより良い生活を送るためにどのようなことができるかスタッフで話し合っているのが印象的だった。診療所には定期的に薬を受け取りに来る人も多く、高齢者になると数多くの薬を服薬している人も多い。薬の一包化は看護師の方が行っており、多少の手間はかかるが患者さんの飲み間違いを防ぐ意味でも数種類の薬を一包化する作業は大切だと感じた。

午後からは、介護サービスの必要度の判定を行う介護認定審査会を見学させて頂いた。介護認定審査会には医師をはじめ、介護士など保健医療福祉の仕事に携わる方たちが7～8名参加し、申請された一人一人について話し合っていた。要介護認定がどのようにして決まるのか実際の現場を見学することで知ることができた貴重な経験だった。介護認定審査会の後は診療所のスタッフの方々と役所の方、保健師の方との間で情報共有を行っていた。

○ 2 日目

診療所は休みであったが、9時から国吉診療所にて地域の方々が参加する「いきいき100歳体操」に参加させて頂いた。約40分間の運動で、手足に重りをつけて行うのでなかなかハードな内容だった。参加していた方は皆体操をしながら会話を楽しんでいたのが印象的で、健康増進を目的とする一方で交流も深まる有意義な時間であった。

次に、国保野上厚生総合病院の看護師の方の訪問看護に同行させて頂いた。訪問看護先の方は病院までの交通手段がなく、また入院はせずに自宅で過ごしたいという方だった。薬の補充をしたり、体調の変化を含め、日常生活の中で困っていることがないかなど患者に寄り添って話を聞いていた。

3. 考察

今回の研修は初めての経験が多くあり、とても有意義な研修であった。いわゆるへき地とよばれる場所にある診療所での診察を見学するのは初めてであり、言葉で聞くだけでは分からない、実際に現場でしか感じることをできないものが多くあったと思う。私がこの研修を通して

特に印象に残っていることは、診療所のスタッフの方々と地域の方々の信頼関係の強さである。よく地域医療ではコミュニケーションが大切であるといわれているが、本当の意味でその大切さが理解できたと思う。その第一歩として、患者さんの名前を覚えて「〇〇さんですね」と声をかけるだけでもより良い関係を築くことができるようになるとおっしゃっていたのが印象的で、実際その重要性をその場で感じる事ができた。また、診療所は病気の人だけに限らず、健康な人にとっても必要不可欠な存在であり、地域の方々の健康面において重要な役割を果たしていることを感じた。診療所がこの役割を果たすためには、やはり地域に対する密着性が欠かせず、単に病気を診察・治療するだけではなく、患者さんが何を望み必要としているか、日常生活の中でどのようなことに困っているのかなど患者さんに寄り添う中でそれらを見極め対処していかなければならないと思った。

また、診療所でもより良い医療を提供するために、限られた設備や人員の中でうまく工夫をすることの重要性も感じた。例えば、今回お世話になった多田先生はエコーでより多くの疾患を診察することができること、地域にいながら専門医のアドバイスを受けることができる遠隔診療支援システム、専門医の意見を聞くことができるアプリ、看護師の方もエコーを使って診察の手助けをできるようにする、など様々なことを積極的に行っていたのが印象的であった。

4. 謝辞

最後になりましたが、今回お忙しい中私たちの研修を受け入れてくださった多田先生をはじめとする国吉・長谷毛原診療所の皆様、見学をさせてくださった地域の皆様、研修を企画してくださった地域医療支援センターの皆様にこの場をかりて御礼申し上げます。この二日間の研修で、将来和歌山県の地域医療に携わることについて改めて考え、より一層精進しようという気持ちを持つことができた有意義な研修となりました。ありがとうございました。

4 有田市立病院



位置 和歌山県有田市宮崎町 6

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠 4 年生

東 丈

病院の概要

- ・病床数は一般 54 床、地域包括 99 床、感染症 4 床
- ・診療科は内科、循環器科、脳神経外科、外科、整形外科、産婦人科、耳鼻咽喉科、泌尿器科、皮膚科、小児科、眼科、麻酔科
- ・指定項目 救急告示病院・災害拠点病院・和歌山 DMAT 指定病院 第二種感染症医療機関
- ・主要設備 手術室 (3 室)、分娩施設、機能訓練室 (253m²)、X 線装置、64 列全身 X 線 CT スキャナ、MRI (1.5 ステラ)、超音波診断装置、患者輸送用自動車、マンモグラフィ、電子カルテ、画像診断システム

研修内容

初日は、外来での診察の見学をさせていただいた。消化器外科の瀧先生のもとで外来に来られた患者さんの病状、病歴などから疾患を考えながらの見学と、疾患は確定しており治療の経過を見るために通院されている患者の診察をこれからの治療はどうするべきか考えながら見学をさせていただいた。前者では、1番最初に来られた患者の印象が強く、二日酔いに対して迎え酒をし、吐血したことからマロリーワイズを疑っていたところ、先生も同じ判断をしていたため、簡単な症例とはいえ、座学の勉強が生きている実感があった。後者は、糖尿病や高血圧のために通院している高齢患者を診察しているところを見学させていただいた。

また、画像検査を行って腫瘍の可能性がある患者を精密検査のオーダーをしたりと、まだポリクリに行っていない私にとって、外来の見学はいい経験になった。

2日目は訪問看護に行かせていただき、午前は高齢の女性のお宅でバイタルチェックをしているところなどを見学させていただいた。

午後は、筋ジストロフィーの患者のところへ訪問させていただいた。病態については、神経学の講義で学んだばかりでよく分かっていたつもりだが、患者の母親からお話を聞かせてもらい、実際の介護の状況や通院状況は分かっていたことを痛感した。

今回の研修では、座学だけでは学べない患者の方との関わり方を見る事ができ、勉強になった。

考察

有田市立病院は、昨年研修に行かせていただいたすさみ病院より診療科が多く、設備も充実しており、有田医療圏の地域包括ケアの中核病院となって住民の健康をサポートしていく体制が作られていると感じた。地域医療病院の状況もそれぞれで違うので、その病院での体制を支えられる医師になることが必要であると考えた。

謝辞

最後になりましたが、今回の研修を行うに際し、準備をいただいた中村先生、外来を見学させていただいた瀧先生、訪問看護に連れて行ってくださった看護師の方、ありがとうございました。この研修で地域医療の実態や雰囲気や以前よりいっそう理解でき、卒後地域医療に携わる上での糧となると思います。

1. 実習施設とその地域の概要

[病院の概要]

名称	有田市立病院
開設日	昭和 25 年 10 月 25 日
開設者	有田市
標榜科	内科、循環器科、脳神経外科、外科、整形外科、産婦人科、耳鼻咽喉科、泌尿器科、皮膚科、小児科、眼科、麻酔科、
病床数	一般 54 床、地域包括 99 床、感染症 4 床
指定項目	救急告示病院・災害拠点病院、和歌山 DMAT 指定病院、第二種感染症医療機関
医療連携	青洲リンク、遠隔医療支援システム
主要設備	手術室 (3 室)、分娩施設、機能訓練室 (253 m ²)、X 線装置、64 列全身 X 線 CT スキャナ、MRI (1.5 テスラ)、超音波診断装置、患者輸送用自動車、マンモグラフィ、電子カルテ、画像診断システム
敷地面積	13,770.373m ²
建物の構造	耐火・耐震構造

[地域の概要]

有田市は和歌山県の中部に位置している。

面積	36.83km ²
人口	26,560 人 (推計人口 2019 年 6 月 1 日)
世帯数	10,576 世帯、
人口密度	721 人 /km ²
高齢人口比率	32.3%

2. 研修内容

- 1 日目 外来見学
- 2 日目 訪問看護見学

3. 考察

有田市立病院は、有田医療圏における地域包括ケアの中核病院を担っている。

有田市立病院で実施されている地域包括ケアの内容としては、地域包括ケア病棟、産後ケア、健康診断の強化、訪問看護ステーション設置の強化などがある。

- ①地域包括ケア病棟では、急性期病院からのポストアキュート、在宅からサブキュートを積極的に行っており、病棟では在宅復帰支援として、普段着での生活・昼食会・健康体操など、スムーズに生活に戻れるようサポートしている。
- ②産後ケアでは、助産師が産後の不安や疑問、相談、要望に対して宿泊ケアや日帰りケア、乳房ケアを行っている。
- ③健康診断の強化では、日常の健康管理・疾病の早期発見のため住民のニーズに合わせた健康診断・脳ドッグの追加、待ち時間やお見舞い時にも行える「ちょこっと検診」、出張健診など様々なサポートを実施している。
- ④訪問看護ステーション設置の強化では、在院期間を極力短縮し、患者の過ごしたい地域で生活できるよう、退院後、訪問看護・訪問リハビリ・訪問診療などの医療サポートを行っている。

このように有田市立病院は、住民の健康をサポートする体制が充実していると感じた。

4. 謝辞

有田市立病院のスタッフの皆様、この度はお忙しい中、大変貴重なお時間をいただき誠にありがとうございました。今回の実習で得た知識や経験を今後に生かして、さらに勉学に励んでいきたいと思っております。本当にありがとうございました。

参考文献 有田市ホームページ <https://www.city.arida.lg.jp/>

和歌山県立医科大学医学部地域医療科 3 年生

荒木 彩加

1、研修施設とその地域の概要

有田市立病院は、昭和 25 年 10 月、有田市の前身である箕島町の国民健康保険直営病院として現在地に開設された。以降昭和 29 年の町村合併、同 31 年の市制施行という開設団体の発展に伴い、増大する地域医療の幅広い医療需要に応えるため、施設・設備の充実と診療機能の向上を図りつつ地域住民の健康の保持と増進に大きな役割を果たしてきた。

病床については、一般 54 床、地域包括ケア 99 床、感染症 4 床を備えている。診療科は内科・循環器科・脳神経外科・外科・整形外科・産婦人科・小児科・眼科・耳鼻咽喉科・泌尿器科・皮膚科・麻酔科の 12 科があり、それぞれ診療を行っている。

また、有田市立病院は有田医療圏に位置している。有田医療圏は 1 市 3 町からなり、総人口は約 7 万人強 (2015 年)、面積は 475 km² の過疎地域型二次医療圏、2025 年の総人口は

約 7 万人で、2040 年には 5 万人まで減少すると予測されている (2025 年比 -29%)。一方で、75 歳以上の人口は、2025 年にかけて 1.2 万人から 1.4 万人へと増加 (2015 年比 +8%) となることが見込まれている。

この医療圏には、有田市立病院を含めて 5 病院が所在し、急性期・回復期・慢性期機能を中心とした医療を担っている。高度急性期医療に関しては隣接する和歌山医療圏にほぼ委ねており、急性期に関しても和歌山医療圏へのアクセスも比較的容易で、和歌山医療圏への依存が極めて高く、患者流出率が他の医療圏と比べ高くなっているのが特徴的である。なかでも、がん・急性心筋梗塞等の疾病に関しては他の医療圏への患者流出が多くみられるが、急性期を脱し、回復期・慢性期の患者については隣接する他の医療圏からの流入がみられるのも特徴的である。その他、小児初期救急も殆どを和歌山医療圏に委ね、分娩についても分娩可能施設が当医療圏内に 1 診療所のみであることから、分娩数の内、一定割合を他の医療圏に委ねてしまっているのが実情のようだ。

研修内容

1 日目 (8 月 22 日) の朝は、2 時間程度内科の外来見学をさせていただいた。予約外来の患者さんばかりで、皆さん 1 ヶ月後くらいに次の外来予約をされてからお帰りになっていたの、長期にわたるケアをなさっているのだという印象だった。分野は幅広く、主に飲酒・肝炎・ピロリ菌 (胃がん) のことで来られる患者さん達の診療を見学させていただいた。例えば、ピロリ菌は発がんリスクの一つと言われているように、検査で胃にピロリ菌が見つかった人はじめ、何らかの病気の発症のリスクがある人の経過観察を行っていることがよく分かった。

同日の昼は、訪問リハに同行させていただいた。訪問リハでは、医師から患者さんの既往歴や病名、内服薬等が書かれた指示書をもとに、患者さん宅を訪問してリハビリを行っていた。私自身、「介護保険」について今まで深く考えたことがなかったが、これには外を歩いてはいけないなどの制限も結構あるようで、ケアマネージャーさんがそこを上手く擦り合わせてリハビリのプランを立ててくださるそうだ。また、この保険では家に設置できる手すりやスロープ、歩く時の助けになるロフトランド杖などを格安でレンタルできるそうで、訪問させていただいた患者さん宅で実際に見せていただくこともできた。確かに、自費で買うと高いものでも、安くレンタルすることで不必要になれば返却することができるし、画期的だと感じた。また、私が訪問させていただいた患者さんの状態としては、老老介護のような感じで、デイサービスに行くことも難しそうだったので、訪問リハというのはこれからも需要が高くなってくのではないかと思った。

上記の訪問リハから帰ってきた後は、軽く病室での胸腔穿刺を見学させていただいた。その後、また訪問リハとは少し違う訪問看護に同行させていただいた。ここでは、入浴介助をしたりバイタルを測る様子を見学させていただいた。先程の訪問リハもそうだが、家を訪問させていた

だくので、病棟で診ているときは気付かなかった家族背景など、様々なことが見えてくるのだろうと感じた。

2日目（8月23日）は、最後に再び内科の外来見学をさせていただいた。主に、内視鏡の検査やエコーを見させていただいた。基礎医学しか学んでいない私にはまだ分からないことも沢山あったが、先生が丁寧に教えてくださり、勉強のモチベーションに繋がった。

考察

全体を通して思ったことは、在宅医療がこれからどんどん必要になってくるだろうということだ。通常病院で行われる入院医療や外来医療が大切なのはもちろんだが、実際に今回訪問リハで見学させていただいた患者さんの家は急な斜面に面しており、私が普通に歩くのも大変な立地だった。さらに、ご家族もご高齢となると、やはり通院も難しいと思われる。高齢化が進む現在、こういった家庭が多くなっていくことは容易に想像でき、より多くの方が在宅医療を必要とするようになっていくと考えられる。在宅医療は、医師をはじめ、歯科医師、訪問看護師、薬剤師、栄養士、理学療法士、ケアマネジャー、ホームヘルパーなど多くの方々が連携して、定期的に患者さんのご自宅などを訪問し、チームとなって患者さんの治療やケアを24時間対応で行っていく医療活動である。私自身、病棟で診ている患者さんにも様々な背景があることを自覚して、自身が赴くこともあれば、そうでない場合も多くの方々と連携をとって、情報を共有し、その時々で適切な医療を提供していかなければならないと、身が引き締まる思いだった。

謝辞

この度はお忙しい中、私たちのために時間を割いていただき、研修をさせて頂きまして誠にありがとうございました。私自身、生まれた頃から有田市で過ごしながらも、有田市における医療を医療従事者側から見学させてもらったことは初めてだったので、特に訪問リハ・訪問看護では新たな発見もあり、興味深く学ばせていただくことができました。将来、地元である有田市で働く可能性も高い自分としましては、その地域で働く意志を強められたことは大きな収穫であったと思います。ご指導をいただいた皆様、本当にありがとうございました。

5 川上診療所



位置 和歌山県日高郡日高川町
川原河 264

6 寒川診療所



位置 和歌山県日高郡日高川町
寒川 293 番地

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠 3 年生

泉 裕太

1、研修施設とその地域の概要

川上診療所と寒川診療所は、共に日高川町にあり、旧美山村近辺に位置する。日高川町は、東西約 35km、南北約 10km で、中央部を日高川が流れ、和歌山県の総面積の約 7% を占め、県下で 3 番目に広い面積となっている。平成 17 年に、川辺町、中津村、美山村が合併して発足した。人口は令和元年 8 月現在で 9,859 人となっており、ダムの建設や高齢化による移住などを経て、減少を続けている。およそ 90% が山々に囲まれており、両診療所のある地域は移動販売などによって物流が補われている。バイクのツーリングや漕艇場のスポットとして親しまれ、奥部には美山温泉療養館と呼ばれる温泉が湧出している所もある。それぞれの付近には、他に病院や診療所はなく、精密検査や入院を含めた治療は山を降りたところにあるひだか病院などまで行かなければいけない。川上診療所の方からは、市外に向けてバスが走っているが、寒川診療所の方からは、一旦川上診療所まで向かってからバスに乗り換えることとなる。高齢の方が多く、診療所までの移動手段を確保することが難しい方も多く、往診や訪問診療が行われている。多い疾患としては、高血圧や糖尿病などの慢性疾患である。活動的な方の関節痛なども多く見られた。山間部のため、蜂にさされた後の処置や、予防のための診察も見受けられた。検査機器としては、レントゲンやエコーが置いてあり、簡単な外科的処置の用意も準備されていた。現場の職員はどちらも、医師、看護師、事務員、事務長の 4 人で構成されていた。川上診療所は 5G 活用実験の検証地になったこともあり、付近に NTT の電波塔も設置され、遠隔診療実現の先駆けにもなっている。

2、研修内容

1日目の午前中は川上診療所での診療の見学をした。15名ほどの患者さんが来院された。そのうち、子供は2名だけであった。多くは高齢の方で、高血圧や高脂血症、糖尿病といった慢性疾患の治療に通う方や、健康診断の結果を受けてレントゲンを撮り直したり、エコー検査を受けたりする方もいた。さらに精密検査が必要な方には大きい病院への紹介状を書くことも多々あった。午後からは、往診に同行した。日によって大方の回る地域が決まっており、この日は6件回った。そのうち一件では、救急車を呼んで入院することがその場で決まったケースもあった。診療所に帰ってからは、川上診療所における5Gを活用した遠隔診察の機器を見せてもらい、青州リンクと呼ばれる患者さんの個人データ共有システムの活用や、それに伴う患者さんの同意の重要性について説明を受けた。また血圧測定なども体験した。

2日目は寒川診療所で診療の見学をした。この日は12名の患者さんが来院された。前日同様に、慢性疾患の管理が多かった。午後からは、各地にある訪問診療所で診療を行ったり、患者さんの家に直接伺ったりして訪問診療を行った。その後、ポリファーマシーへの対策や、アドバンスドケアプランニングの考え方について説明を受けた。

3、考察

川上・寒川地区は過疎化が進んでおり、少子高齢化もかなり進んでいた。慢性疾患の管理が主たる業務であったが、どちらの診療所の職員の方も、地域の住民に関して多くのことを記憶しており、診療も大変スムーズに進んでいた。同じ県内でも言い回しが違ったりすることで、聞き取りにくいこともあったが、しっかりと対応されていた。僻地で働く上で、地域に寄り添って住民の方々のことを理解するということが実現されていると感じた。川上診療所における5Gの活用など、僻地にいながらも最新の技術・情報を取り入れている姿勢は将来医師として地域で働く上で、心に留めておきたいと思った。また、訪問診療で行ったところには、車一台通るのがやっとで、雨風の被害によってはそれすらもできなくなりそうな地域もあった。緊急時に備えて、先を見通した診察、処方方を心がけることが大切だと思った。プライマリーケアとして広い範囲について学ぶことはもちろんのことであるが、信頼できる治療を患者さんに提供するためには、自分の力の及ぶ範囲について認識し、中核病院や大病院に頼ることも必要だと感じた。そのために導入されている青州リンクのような他の病院との情報共有システムは、地域で働く際に積極的に取り入れていきたいと考えた。

4、謝辞

この度は、大変貴重な研修機会を与えてくださった、川上診療所の平林先生、寒川診療所の新谷先生をはじめ、職員の方々に感謝申し上げます。実際に地域に赴くことで、学内では経験することのできないことをたくさん学ぶことができました。今回の研修で学んだ、地域で働く

上で医師として必要な姿勢を頭に入れて、今後の学業に励んでいきたいと思います。至らないところも多々あったかと思いますが、熱心に指導していただき、本当にありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠 3年生

高橋 翠

1. 研修施設とその地域の概要

研修 1 日目に行かせていただいた川上診療所は日高川町の日高川沿いに位置する。医師 1 名、看護師 1 名、理事長 1 名、事務 1 名の計 4 名のスタッフで運営されている小さな診療所である。診療所内にはレントゲンを撮る機械や胃カメラ設備もあり、必要に応じて全て医師と看護師が操作している。また、遠隔診療が受けられるようにパソコンとカメラが診察室内に置かれている。川上診療所の医療圏には 200 名ほどが生活している。そのうちのほとんどが高齢者で、高血圧や糖尿病の患者が多い。

研修 2 日目に行かせていただいた寒川診療所は日高川に沿って川上診療所から車で 30 分ほど上流に走ったところにある。この診療所も医師 1 名、看護師 1 名、事務長 1 名、事務 1 名の計 4 名で運営されている。寒川診療所の医療圏にも 200 名ほどが生活しているが、山奥に住んでいる方なども多く、往診でカバーしている範囲はかなり広い。

2. 研修内容

研修 1 日目川上診療所での午前中は外来診察を見せていただいた。以下に診察内容を記す。例えばある患者さんは男性で、糖尿病、高血圧、高脂血症があり、診察に訪れた。ほかにも逆流性食道炎の患者さん、膝関節が痛いということで、ヒアルロン酸を注入した患者さん、熱中症を疑った患者さん、定期検診で胸部レントゲンを撮った結果、さらに詳しい検査が必要で CT のある施設への受診をすすめられた患者さんなど、様々な症状や疾患の患者さんが 14 名来院された。午前の診察後、清州リンクについての説明を受けた。清州リンクとは和歌山県内の提携病院間で患者の血液検査、検査画像、注射、投薬などの情報をインターネット上で共有できるようにしたもので、複数の病院にかかっている患者や、紹介を受けた患者の情報を得るために活用すると伺った。

午後からは往診で、同地域の 5 軒を廻った。往診先の一人の患者さんは、発熱があり、結果的に日高病院へ搬送されることになった。往診であっても慢性疾患だけではなく、急性疾患にも対応する必要があることを知ることができた。

研修 2 日目は寒川診療所で、午前中に外来診察、午後から往診廻った。寒川診療所での研修については、特に気になった患者についてのみ記す。外来診察の 9 人目の男性は、かかとを石

で切って、寒川診療所で縫合した後の抜糸に訪れた。その際に診療所で縫合できる傷と、専門の病院に紹介すべき傷について説明を受けた。筋膜まで傷が達していた場合、細菌感染の可能性が高いため、専門の病院に送るべきだが、皮下組織までの傷なら診療所で行うことができると教えていただいた。10人目の男性は、数日前にアシナガバチに刺されアナフィラキシーショックに近い症状になり、救急搬送されていたため、エピペンを持つことを勧めた。この地域では夏になるとハチに刺される人が多く、エピペンを勧めることも多いと伺った。午後の往診では広範囲の4軒5人と出張診療所2軒を廻った。この日、出張診療所は1軒目が0人、2軒目が1人と、患者は少なめだった。寒川診療所まで行くのが困難な方のために週2回出張診療所での診察を行っているようだ。往診でのある女性は発作性心房細動があり、βブロッカーを服用していたが、ホルター心電図の結果では脈が長くなっており、βブロッカーの影響が強いと考えられたためβブロッカーを中止した。今後も様子を見ながら薬を選択するとのことだった。頻脈がひどくなる場合はβブロッカーを再開し、ペースメーカーを埋めることも考えなければならぬと伺った。

3. 考察

今回の研修で、私は自分の僻地医療に対する考え方の甘さを実感した。僻地医療が大変ということは十分に分かっているつもりだったが、実際に診療所に行ってみて、自分が想像していた大変さとは異なる大変さがあることを知った。まず、最も驚いたのが往診範囲の広さである。各家が離れており、独り暮らしの高齢者も多く、診療所までの交通手段も少ないため、なかなか診療所へ行くことができない方が多くいた。また、老々介護の世帯も多く、患者さんのご家族全体に合った医療の提供方法を考えていかないといけないということも感じた。医療スタッフの少なさも驚いた点の1つである。どちらの診療所も看護師さんが休んだ場合は、全て医師一人で診察を行うことになるという聞いて、知識は当然ながら、体力や速度も求められるのだなと思った。一方で、僻地医療の魅力を感じた点もあった。僻地医療では、その地域のほとんどの人がその診療所に来るため、ほとんどの人と知り合え、地域全体を診る医師になれるということだ。

4. 謝辞

今回の研修では、平林先生、新谷先生をはじめ、川上診療所、寒川診療所の皆様にはお忙しい中お時間を割いていただき、貴重な経験を積むことができました。今回の病院研修が初めて僻地医療に触れた機会でしたが、先生方の熱心なご指導のおかげで大きな衝撃と感動を味わうことができました。今後は、今回学んだことを忘れずに地域、医療にどうすればより大きく貢献できるかを考えながら、勉学等に励んでいきたいと思っております。2日間ありがとうございました。

7 白浜はまゆう病院



位置 和歌山県西牟婁郡白浜町 1447 番地

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠 3 年生

松本 和樹

1. 研修施設とその地域の概要

和歌山県の田辺医療圏の病院の一つである白浜はまゆう病院は公益財団法人白浜医療福祉財団によって運営されている。病床数は 258 床あり、その内訳は一般病棟 82 床、医療療養病棟 50 床、地域包括ケアセンター 28 床、介護療養病棟 50 床、回復期リハビリ病棟 48 床である。病床稼働率は一般病棟 88.2%、医療療養病棟 96.4%、地域包括ケアセンター 81.3%、介護療養病棟 96.5%、回復期リハビリ病棟 89.9% である。診療科は内科、外科、整形外科、小児科、皮膚科、眼科、耳鼻咽喉科、神経内科、呼吸器科、循環器科、消化器科、リウマチ科、リハビリテーション科、婦人科、泌尿器科、麻酔科、心療内科、脳神経外科、アレルギー科、

乳腺外科がある。職員は医師が常勤 20 名、非常勤 26 名、看護師などその他は常勤 314 名、パート 53 名で合計 413 名が勤務している。併設されている南紀白浜温泉リハビリテーションセンター、通所リハビリテーションセンターでリハビリテーションにも精力的に取り組んでおり、地域リハビリテーション広域支援センターの指定を受けている。その他にも、人間ドック・検診センターや訪問看護ステーションがあり、予防から在宅医療まで一貫した地域に根ざした医療を行っている。また 公益財団法人白浜医療福祉財団は、白浜はまゆう病院の他に西富田クリニック、鮎川診療所、日置診療所、三舞診療所、川添診療所の 5 つの診療所を運営している。これらの病院および診療所は、ネットワーク化された共通の電子カルテシステムを使用しており、受診先に関わらずこれまでの診療を反映した医療を提供することを可能としている。病院や診療所へのアクセスが困難な患者のためにバスや車による送り迎えも実施し、移動手段が少ない高齢者への支援も積極的に行われている。

2. 研修内容

今回の病院研修は自治医科大学で和歌山県民卒の中尾さんと 2 人で研修を行った。

〔1 日目〕

午前：谷口院長、次長、総務課長による病院理念や概要の説明、院内の案内

午後：訪問看護、医局会

〔2 日目〕

午前：川添診療所

午後：鮎川診療所

3. 考察

1 日目はまず午前中にはまゆう病院の谷口院長に挨拶をし、今回の地域医療における病院での研修に対して、目標や考えを再確認する機会となった。私は今回の研修で、市内から外れた場所での医療の連携の仕方や診療所の意義をしっかりと学び、将来自分がこういった場所で働くための知識や考えを少しでも身につけようと思い、研修に臨んだ。また、院長からこの田辺地域における医療ネットワークを教えてもらった。その医療ネットワークとは、1 の項目でも書いたが、白浜はまゆう病院を中心に、より僻地の方には診療所を置き、合計で 5 つの診療所と連携して、できる限り広い範囲の地域に医療を届けられるようにしていると説明を受け、これから高齢化社会になっていく状況に対しても、しっかりと対応できるようになっていると思った。そして、午後からは、白浜はまゆう病院内で訪問介護ステーションたんぽぽがやっている訪問介護の様子について見せてもらった。このたんぽぽでは、地域のみなさまに、安心して家庭での療養を行って頂けるように、介護を中心とした介護サービスやリハビリテーションを、かかりつけ医師の指示に基づいた形で提供する、という考えで訪問介護を行っていた。実際、

たんぽぽで働く看護師たちは担当の患者さんたちの病気の症状や現状をしっかりと把握し、また、患者さんだけでなくその家族のことも含めて介護の仕方を考え、柔軟に対応しており、このように、患者さんごとに柔軟に対応できることは本当に大切なことだと感じた。また、自宅療養をするためには家族さんの手助けも必要不可欠なので、こういった地域で働くことになる、より家族さんとの連携をしっかりとっておかないといけないと思った。そして、病院に戻ってきて、最後に医局会に参加した。医局会では、医師たちがそれぞれ担当の患者さんたちの病状や様子などを一人一人話していき、気になることや大切な発見などを共有したり相談したりしていた。このようにして、担当の医師だけでなく、他の専門医たちからの意見も聞き、病院全体で患者さん一人一人をみるということはずごく大事だと思った。

2日目は、午前中は中尾さんと別れて一人で川添診療所へ行った。私は、今までの3年間で何度か研修に行く機会があったが、診療所に行くのは初めてだったので、診療所がどのような場所なのか想像はあったが、実際はどのような場所か知らないの、しっかりと見て学ぼうと思っていた。実際、場所にはよると教えてもらったが、川添診療所は、白浜はまゆう病院から山を越えて車で40分かかる、本当に集落のような場所にあった。また、診療所には、日替わりで医師が1人と、看護師、薬剤師、また、患者さんたちを送り迎えするための車もあった。診療所内は、最低限の診療ができるくらいの設備があり、もし重い病気の疑いなどが見つかったら、白浜はまゆう病院と連携を取ることでしっかりと対応していくという形であった。このようにして、診療所が一つあることで、僻地に住む人たちは、ない状況に比べると比べものにならないくらいの安心感があるだろうと思った。実際、患者さんとお話をする機会があり、そのように仰っていた。そして、午後からは再び中尾さんと合流して、鮎川診療所に行った。そこでは、松中先生と一緒にそこの診療所が担当している患者さんたちの家に訪問診療に行った。その訪問診療をする松中先生の姿を見て、お年寄りの方との接し方や話し方、患者さんの病状に合わせた様々な工夫や家族さんたちとの連携など本当に多くのことを学ぶことができた。優しく大きな声で手を握りながら話をする姿を見て、自分が目指すべき医師のように思えた。しっかりと患者さんそれぞれに寄り添うことができる医師になれるよう、これからも精進していきたい。

4. 謝辞

お忙しい中、私たちの研修を受け入れてくださった谷口院長をはじめ、白浜はまゆう病院、川添・鮎川診療所の皆さま、田辺地域の方々、今回の病院及び診療所研修を企画してくださった和歌山県立医科大学地域医療支援センターの方々にこの場をお借りしてお礼申し上げます。ありがとうございました。

8 国保すさみ病院



位置 和歌山県西牟婁郡すさみ町周参見 2380 番地

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠 3 年生

野久保 翔太

1. 研修施設とその地域の概要

病院の概要： 病床数は、一般病床 48 床、療養病床 24 床（医療型 6 床、介護型 18 床）、計 72 床

内科、外科、整形外科の診察

患者は高齢者がほとんど

地域の概要： すさみ町は面積 174.45km²、人口約 3,720 人

漁業、林業、農業、観光業が基幹産業

特に漁業が盛んで、カツオ、ブリ、伊勢海老などの水揚げが多い

内陸部ではスギ、ヒノキなどの林業が伝統的である

2. 研修内容

1 日目の午前は、山本副院長の外科の外来を見学した。局所麻酔でイボを取る施術を行った。午後は、佐本診療所への訪問診療を見学した。

2 日目の午前は、高垣院長の内科の外来を見学した。その後、すさみ町の現状やすさみ病院の機能などの解説を受けた。

3. 考察

診察に来た患者のほとんどが高齢者で、一番若い患者で40代だった。一つの病気や怪我だけでなく複数の問題を待っている方が多く、糖尿病と高血圧を会話の中でよく聞いた。さらに、心臓に不調を抱えている方も多くいた。自分たちも実際に補聴器を使って患者さんの心音を聞く機会があった。ここが自分の知識の無さを感じたところでもあった。また、特に佐本診療所で患者がよく言っていたのが、クーラーを使わずに扇風機と窓から入ってくる風だけで暑さをしのいでいるということだった。クーラーがない家もあるのだが、持っていてなぜか使おうとしない方が多かった。舌の水分量を確認し、実際にクーラーのついた診察室に入ると涼しいと患者が言うのを聞いて、先生も熱中症を防ぐために使う事を勧めるのだが、納得してくれたかどうか不安になる反応をしていた。なぜ使おうとしないのか理由はわからないこともあり、先生も何人もの患者さんに同じ事を言い続けるのは大変そうだった。佐本診療所への訪問診療はすさみ病院から車で30分弱かけていくのだが、高齢者の多い村にとっては必須の訪問だということが感じられた。今はまだアクセスも改善した方だが、かつての道のりを高齢者が定期的に通うのはかなり負担がかかるだろうと思う。病院でも診療所でも、患者も先生に対してとても打ち解けていて、基本的に楽しそうに話し、穏やかに診察が進んでいくのが印象的だった。最後には院長先生からスライドを使っての総括をしていただいた。この地域における病院の役割はもちろん、院長先生の子供たちへの教育や、町民の方々も知識を持つことができるようにと定期的に自らその時期折々の医学に関するコラムを連載したりと、病院や診療所以外での活動も知ることができた。実際、喫煙に関する子供向けの講義を小中学校に出向いて行い、町内での喫煙率の減少に貢献しているということを知った時は感動した。また、高齢者の家に赤外線センサーを住民負担500円で設置することで孤独死を予防するなどの効果が期待できるものや、ドクターカーといった日本でも先進的だった取り組みを聞き、地域医療の関わり方の一つの方法として自分の中で新しい知識となった。自分が医者という職業をイメージした時の範囲を超えた地域への関わりがあるということは、今回の研修で大きな印象に残った。

4. 謝辞

今回、地域医療研修として充実した研修を行わせていただいた高垣病院長をはじめとする先生方、協力していただいた事務の皆様から心から感謝いたします。とても有意義で刺激のある研修でした。ありがとうございました。

1. 研修施設とその地域の概要

今回私が研修させていただいたのはすさみ町にあるすさみ病院である。すさみ町は、紀伊半島の南西に位置し、紀伊山地を背に白浜町、古座川町、串本町と隣接し、太平洋に面している。主要産業は農林漁業で、「ケンケン鰹」と呼ばれる鰹が有名である。人口は約 4,000 人で、約 47% が 65 歳以上と全国平均と比較すると高齢化率が高い町となっている。

2. 研修内容

- | | | |
|--------------|--------|----------------|
| 8 月 22 日 (木) | ・ 外来見学 | ・ 佐本診療所での検診見学 |
| 8 月 23 日 (金) | ・ 外来見学 | ・ 看護師による訪問看護見学 |

3. 考察

外来見学では、診察にいらっしゃった患者は高齢の方が多く、小児の患者はほとんどみられなかった。また、患者のほとんどが高血圧などの慢性的な疾患で来院されており、すさみ病院はかかりつけ医としての役割が大きいと考えられる。

佐本診療所での検診でも、外来の時と同様に、高齢者の患者の割合が大きく、高血圧や高脂血症、糖尿病を患っている方が多かった。佐本からすさみ病院までは車でおよそ 30 分かかり、高齢者には車を持たれていない方も多くいると考えられるので、定期的に佐本診療所での検診での検診を行うことはとても重要であると考えます。

2 日目の訪問看護では、人工肛門をされている方のパウチの交換を見学させていただきました。看護師が 1 人で訪問されていたので、負担は大きいと思うが、自力では病院に生きづらい方にとっては便利だと思った。

最後には、院長先生によるすさみ病院での取り組みを聞かせていただいた。すさみ町に限ったことではないが、山岳地帯が多く、ドクターヘリが着陸しにくいような場所が多い地域では、ドクターカーが重要な役割を担っていることが分かった。

4. 謝辞

この度は、お忙しい中、病院見学の機会をいただきまして誠にありがとうございました。

外来見学や佐本診療所へ同行させていただいたり、貴院でしかできない貴重な体験をたくさんさせていただき、大変有意義な時間を過ごすことができました。

貴院で学んだことを今度は医師として発揮できるように、今後はより一層学業に取り組んでいく所存です。心より御礼申し上げます。

9 那智勝浦町立温泉病院



位置 和歌山県東牟婁郡那智勝浦町大字天満 483 番地 1

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠 3 年生

小西 朋樹

1. 研修施設とその地域の概要

○病院の概要

那智勝浦町立温泉病院は昭和 39 年 7 月に設立され、病床数は一般 120 床となっている。診療科は内科、循環器内科、糖尿病内科、整形外科、リハビリテーション科、眼科があり、また救急告示病院、災害支援病院、地域リハビリテーション広域支援センター、臨床研修病院の認定を受けている。

平成 30 年 4 月に新病院が開設し、より地域と連携した医療が行われている。

○地域の概要

那智勝浦町は和歌山市内より電車で3時間ほどの海沿いに位置し、新宮医療圏に属している。那智山の門前町である那智町と、温泉と漁業の町勝浦町、さらに色川村と宇久井村の4つの町村が合併し、昭和30年4月に誕生した。その後昭和35年1月に下里村、太田村が加わって現在の那智勝浦町となった。紀伊半島の南東端に位置しており、気候は温暖であり、雄大な自然、豊富な水産資源に恵まれている。令和元年8月1日現在、183.31平方キロメートルに15004人、7884世帯が暮らしている。

ユネスコの世界遺産に登録される「紀伊山地の霊場と参詣道」の熊野エリアに位置しており、紀伊半島でも有名な観光地として国内外からも多くの観光客が毎年訪れる。さらに、那智の滝やマグロの水揚げ量が全国有数であることでも有名なほか、和歌山県内では温泉の泉源数も最多であり、魅力多い町となっている。

2. 研修内容

○研修日程

1日目 (8月22日(木))

- 午後 13:00~13:30 リハビリテーション科、リハビリテーションセンター見学
- 13:30~14:00 外来見学 (一般外来)
- 14:30~15:00 内視鏡検査見学
- 15:00~16:30 救急外来見学 (心電図、CT検査、採血など)
- 17:00~17:30 薬剤勉強会

2日目 (8月23日(金))

- 午前 8:30~8:45 前日に入院された患者のカンファレンス
- 9:00~10:00 外来見学 (一般診療、打診、聴診、喀痰検査など)
- 10:00~11:00 那智勝浦町消防、重度心身障害者施設見学
- 11:00~11:30 病院概論説明
- 11:30~12:00 検査見学 (9:00からの外来で見学した患者)

○研修の流れ

1日目は午後に到着し、昼食をとった後、先生方に挨拶をし、リハビリテーション科の見学を行った。リハビリテーション科においてはリハビリテーションセンター「kakeru.」を併設しており、実際に見学中も患者や医療者の方がリハビリを行っていた。当病院のリハビリテーション科は和歌山県立医科大学のリハビリテーション科のサテライト機関である、リハビリテーション・スポーツ・温泉医学研究所を併設しており、日本に一台しかないリハビリテーション

の機器もあり、日本のリハビリテーションの先端を担っているところが随所に感じられた。また、リハビリテーションを行っている患者が皆自発的に行っているところが印象に残った。先生の話では、毎日リハビリテーションセンターに来てリハビリテーションを行っている患者もいらっしやるとのことであった。

その後、一般外来と救急外来を見学した。一般外来では、熱傷の患者に対しての治療の手順を見学し、さらに救急外来では、実際に救急車で搬送されてきた患者に対し、心電図やCT検査、採血などを行うところを見学した。外来では、主訴だけでなく、既往歴や現在服用している薬、どのような職業をしているのかなどを患者に伺った後、鑑別疾患をあげながら全身の身体所見をとり、その患者に応じた様々な検査をオーダーし、それを実行するまでの流れをしっかりと確認できた。さらに、内視鏡を用いた胃の検査も見学することができた。実際にどのようなところに気をつけて行っているのかを説明していただき、ポイントを理解することができた。

また、実際に薬剤会社の方が病院に来て、新しい薬を説明する勉強会にも参加することができた。どのように新しい薬を病院が導入するのかの流れがよく分かった。

2日目の朝からは前日に入院された患者に対するカンファレンスが行われた。院長先生も交えた上で、前日搬送されてきた患者の容態やバイタル、現在の状態が共有された。その後の外来見学では、前日と同じように先生の横につき、実際に聴診や打診などの検査を体験した。やはり患者の症状に応じた検査を選択し、症状の原因を突き止めることが重要であると感じた。

さらに、院長先生とともに病院の敷地の隣にある那智勝浦町消防本部を見学した。消防本部では当然のことながら救急車を出勤させて急患の迅速な搬送をするが、それだけではなく水難事故などの有事の際に迅速な救助を行うための車輛など、普段見ることのできない様々な設備があった。患者を救うためには医療従事者以外との連携も非常に重要であると感じた。また、敷地内にある重度心身障害者施設見学「かのん」では、デイサービスの形態で障害のある方が通われていた。ここでも、病院と連携して通所者の病態管理が行われ、さらに施設内でも様々な企画が行われていた。

その後、院長室で院長先生から病院の沿革や地域の特徴についてお話を伺った。平成30年度から病院が移転したが、新たに新病院ができたことで、さらに地域の住民のニーズに応えられる医療ができると感じた。また、その後にも学生からの質問に丁寧に答えてもらい、研修医としてどのように地域の病院で働いていくのか、イメージがより明確になった。

3. 考察

2日間という短い期間での研修ではあったが、印象に残ったのは、リハビリテーションを中心としている特徴のある医療である。那智勝浦町の特徴である温泉と、リハビリテーションを両立させるため、和歌山県立医科大学のリハビリテーション科との共同研究所をおくことで、患者のリハビリテーションに力を入れつつ、さらに地域住民の健康を支える取り組みをリハビリテー

シヨンの観点から行っていた。そのため、日本に一つしかないリハビリテーションの器具など、最先端の取り組みを行っているところが随所に現れていた。当病院は大病院ではなく、地域の町立病院であるため、その地域の特色をしっかりと理解し、地域にあった特徴を持つことが求められるが、特に高齢者が多い那智勝浦町において、リハビリテーションを軸として地域と密に関わるために行政、和歌山県立医科大学と連携を模索しているところが印象的であった。

さらに、当病院では、院長先生から上級医の先生、研修医の先生まで、全ての先生がしっかりと中心に立って医療に当たっていた。目の前の患者を診察、診断し、必要な検査をして適切な治療法を考えていくことは医師として当たり前のことではあるが、自身の専門外の領域も診察しなければならない、総合診療の技術が多岐に求められる現場であった。当病院では特に中堅の医師が少ないため、一人一人が責任を持ち、自分に与えられた役割をしっかりとこなすことが重要であると感じた。またカンファレンスなどで医師同士が意見交換し、知識を共有、交換することで、先輩医師から新たな知識を得られることも多くあり、全員が成長していくと感じられた。それによってチームとして最善の医療が提供されると思った。

4. 謝辞

最後になりましたが、今回2日間、お忙しい中研修を受け入れてくださった那智勝浦町立温泉病院の山本院長先生をはじめ、医局の先生方、中村事務課長、那智勝浦町消防本部の皆様、重度心身障害者施設見学「かのん」のスタッフの皆様、研修の機会と準備をしていただいた病院スタッフの皆様、和歌山県立医科大学地域医療支援センターの皆様、和歌山県庁の医務課の皆様、この場を借りて改めてお礼を申し上げます。この2日間の研修で、より地域で働く医師の姿を明確にイメージすることができるようになりました。本当にありがとうございました。

10 新宮市立医療センター



位置 和歌山県新宮市蜂伏 18-7

和歌山県立医科大学医学部地域医療科 3 年生

谷地 晃

1. 研修施設とその地域の概要

新宮市立医療センターは新宮市蜂伏にあり、新宮市及び東牟婁郡（那智勝浦町、太地町、古座川町、串本町、北山村）の新宮保健医療圏に加え、田辺市本宮町、奈良県十津川村、三重県熊野市及び南牟婁郡といった広範な地域の患者を受け持つ、地域の拠点病院としてその役割を果たしている。診療科は内科、外科、小児科、産婦人科など 19 科で、一般病床 300 床、感染症棟 4 床からなっている。今回研修させていただいた内科は一般内科医 8 名、腎・透析内科医 3 名が所属し、消化器、呼吸器、糖尿病・内分泌、血液・造血器、腎疾患など内科全般にわた

る幅広い疾患に対する診療を行っている。内科の患者数はひと月あたり約 1850 名である。

新宮市は和歌山県の南部、三重県や奈良県との県境に位置している。南部における中心地として機能しているが、人口は 28,417 人（令和元年 9 月 1 日）と減少の一途を辿り、また、新宮保健医療圏の高齢化率は 39.1%（平成 27 年）と県全体の 30.9%（平成 27 年）に比して高く、人口減少、高齢化問題が顕著となっている。気候としては夏季の降水量が多いものの年間を通して温暖で住みやすい地域である。産業としては、漁業、林業、農業と幅広く盛んで、勝浦漁港に水揚げされるマグロや北山村で栽培されるじゃばらなどが有名である。また観光地としても魅力は多く、熊野古道の霊場と参詣道が世界遺産に登録されてからというもの、関連する神社仏閣や那智の滝などを訪れる人が非常に多くなっている。

2. 研修内容

8 月 15 日、16 日両日、内科の向井陽祐先生のもとで研修を行った。

〔8 月 15 日〕

まず、向井先生に付き添い、入院患者の回診を行った。先生は一人ひとりの目をしっかり見ながら体調を聞き、丁寧な声掛けをされている姿が印象的だった。これまで回診を見学した経験は、大学病院での教授回診、一度のみだったが、それと比較して地域の病院での医師と患者の距離の近さを実感した。次に大腸カメラを用いた大腸検査、ポリープ切除、総胆管結石除去等を見学した。治療は患者の様子を伺いながら、また時折投げかけられる患者の質問に対して解説しながら行われた。患者にとっても納得しながら治療が進められていたのだろうと推測する。この日はお盆の時期でかつ台風が直撃していたこともあって外来患者はほとんどみられなかったが、先生方は常に入院患者のカルテをチェックしたり、治療方針について話し合ったりするなど、一人ひとりにきめ細かい対応をされていた。

〔8 月 16 日〕

二日目はまず、胃カメラ検査とのちに胃瘻造設術を見学した。胃瘻とは腹壁を切開し、胃内に管を通すことで、人工的に水分や栄養補給を可能にする治療である。今回の見学例では不運なことにマロリーワイスがみられ、胃壁が脆弱であることが確認された。このような予想外の事態が起きたとしても、複数の治療方針の中から最適解を適切に選択して冷静に対処することが大切だと教えていただいた。午後のはじめは前日と同様、大腸検査とポリープ切除について学んだ。ポリープ切除術の際には、ポリープが増大して癌化するのを防ぐため、直径約 6mm 以上のものを切除することを目的としていたが、想定よりもポリープが多く、大きかったこともあり、直径約 1cm 以上のポリープを選択的に切除する方針に変更された。患者さんの負担を考慮し、臨機応変に対応されていた。その後、会議室に移動し、退院患者の引渡しに際する退院後の生活についての打合せの様子を見せていただいた。

3. 考察

二日間を通して感じたのは、先生と患者の距離の近さと、地域への密着度合いの高さである。診断、治療の場面においては、医療者が患者に対してきめ細かく対応し、丁寧で患者視点に寄り添った声掛けが徹底されていると感じた。長期間にわたって関りをもつことも多い地域拠点病院の医療者と患者との信頼関係のベースには一つひとつの行動の積み重ねがあることを体感できた。

また、特に地域に根ざした医療支援として、退院患者の引渡しに際する退院後の生活についての打合せが印象に残った。退院してもサポートしてもらえる家族がいない患者さんに関して、主治医、担当の看護師、理学療法士等、病院での入院生活をよく知るスタッフと訪問看護の職員やヘルパーさんといった、退院生活を身近に支えていく方々との間で意見交換が行われた。お互いに患者さんの性格や行動の特性などは熟知しており、退院後どのように食生活をサポートしていくか、ということや、緊急時にはどのように対応し、連携していくかといったことについて綿密に打ち合わせがなされた。家族がいない中でこれほど患者さんにとって心強いことはないだろうと感じた。先にも述べたように、人口減少や高齢化を抱える新宮市およびその周辺地域には一人暮らしの高齢者の方々が多く存在する。このような方々にとって、地域の拠点病院が主導となって退院後の生活までもサポートする体制が整っているのは意義深いと思う。

4. 謝辞

今回の研修では向井陽祐先生をはじめ、内科の先生方、新宮市立医療センターの方々には大変お世話になり、厚く御礼申し上げます。先生方に親身になって指導していただき、地域の拠点病院が果たす役割の大きさを実感しました。また、新宮市立医療センターは新宮市出身の私にとって、これまで一患者としてなじみの深い場所でしたが、そこには職員さんの徹底された患者を思う気持ちと努力があることを知り、見識が広がりました。ありがとうございました。

11 高野山総合診療所



位置 和歌山県伊都郡高野町高野山 631 番地

12 国保北山村診療所



位置 和歌山県東牟婁郡北山村大字大沼 312

県外研修

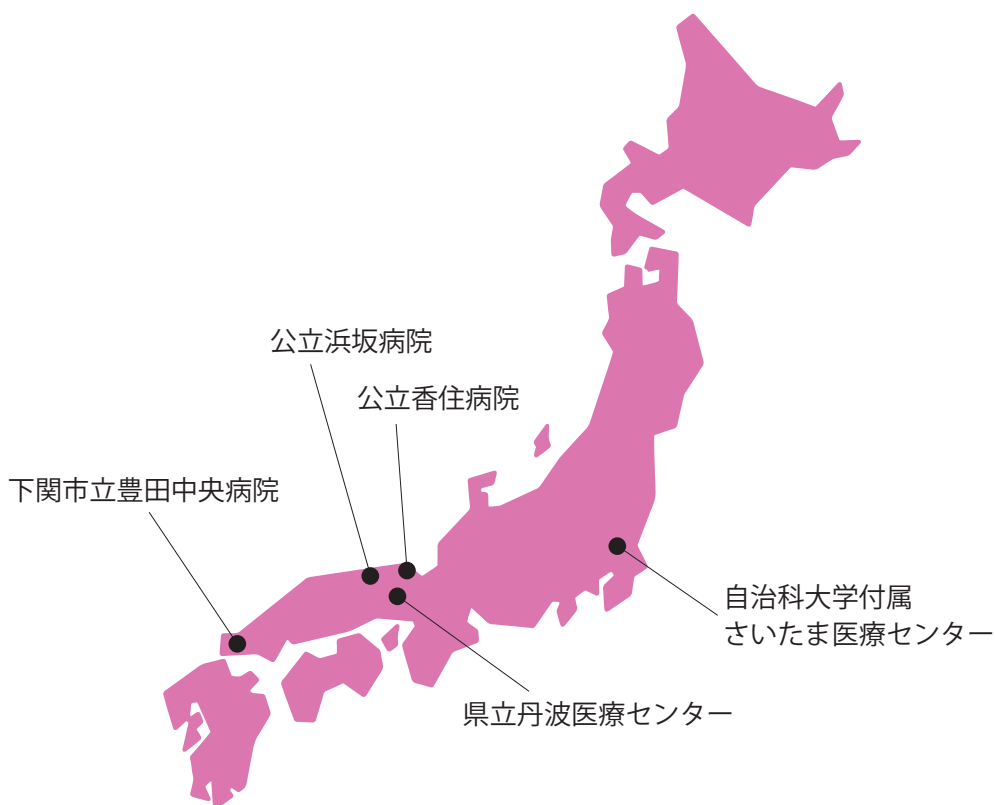
< 県外研修 >

令和元年8月22日(木)～24日(土)に神戸大学主催の地域医療夏季セミナーに参加し、26日(月)～28日(水)の間は自治医科大学附属さいたま医療センターで、28日(水)～29日(木)には下関市立豊田中央病院で、地域医療枠5年生が県外研修を行った。

参加者名簿

和歌山県立医科大学医学部 地域医療枠

研修先	学年	氏名
自治医科大学附属さいたま医療センター	5年生	大道 彩夏
	5年生	仁木 龍登
地域医療夏季セミナー 2019 in ひょうご (公立香住病院・公立浜坂病院 ・県立丹波医療センター)	5年生	塩谷 一樹
	5年生	松尾 薫
下関市立豊田中央病院	5年生	井上 育美
	5年生	師玉 拓季



1 自治医科大学附属さいたま医療センター



位置 埼玉県さいたま市大宮区天沼町 1-847

和歌山県立医科大学医学部地域医療科 5年生

大道 彩夏

1. 研修施設とその地域の概要

自治医科大学附属さいたま医療センターは、埼玉県さいたま市大宮区にある病院で、地域密着型の病院として地域住民の健康を支えているとともに、大学病院として高度医療の提供の役割も担う。診療科目は内科、神経内科、呼吸器科、外科、整形外科、小児科、産婦人科など幅広く、精神疾患以外のすべての疾患に対応する。一般病床は 628 床である。

さいたま医療圏は、大都市型の二次医療圏で、高機能病院や地域の基幹病院が複数あるが、人口に比して急性期医療の提供能力が低いとされる。そのため、県央などから多くの患者が集まってくる一方、周囲の医療圏への流出が多い医療圏である。また、今後高齢化が大幅に進むことが予想され、それに伴う医療需要の増加への対応が課題となっている。

2. 研修内容

【8月26日】

1日目はまず、総合診療科の先生方から、総合診療科ではどのような患者を診るかを教えていただき、現在病棟に入院している患者の病態について説明を受けた。主に、原因不明の患者や、マルチな全身疾患をもった患者が多く、医師として幅広い知識をもつこと、その知識を生かして患者の必要な情報を抽出して考える能力が必要だと感じた。

また、総合診療科の教授である菅原先生から総合診療科とはどういう科なのか、総合医に必要なものは何か、などのお話を伺った。幅広い知識を持ちつつも、より得意とする分野の研鑽も大事だと教えていただいた。また、どの科の医師にも通ずることだが、不安の傾聴、病状説明の反復、家族とのコミュニケーション、在宅・介護・福祉の適応検討など患者を全人的に診て関わる必要があると感じた。

夕方には、カンファレンス、病棟回診に参加させていただいた。原因不明な患者に対しては、鑑別疾患を挙げて一つずつ否定できるかを考え、最終的な診断をつけること、マルチな全身疾患をもった患者に対しては、自分たちでできる範囲のことは行い、できないことは専門の医師に任せることが大切だと教えていただいた。

【8月27日】

2日目は血液内科で研修をした。和医大出身でもある玉置先生から自家移植、同種移植について、移植後経過についてなどを丁寧に教えていただいた。また、移植後の患者の様子を実際に診せてくださり、特徴的なクリーンルームについても説明していただいた。

午後は、総合診療科の勉強会に参加した。英語論文の抄読などを通じて様々な議論が交わされており、将来自分もそのレベルに達せられるように励んでいきたいと感じた。

夕方は、再び血液内科に戻り、カンファレンスに参加した。日本有数の移植センターということもあり、移植前、移植後の患者が非常に多かった。また、ハプロ移植が行われることも少なくないという印象を受けた。

【8月28日】

3日目は、総合診療科と血液内科の合同カンファに参加した後、総合診療科の先生に付いて研修を行った。その先生のチームが受け持つ患者について一通り説明していただき、現在の状況を把握した後、一緒に回診に行った。聴診もさせていただき、現在の病態や、今度どういう検査が必要かなどを丁寧に教えていただいた。また、外来診療の様子も見学した。総合診療科として、まず診断するためにどういうことを患者に問診するべきか、追加で検査すべきことは何かなどについて考えることができた。先生は、ある程度第一に考える疾患を思い浮かべたうえで、他の鑑別すべき疾患を想定して診察、検査のオーダーを行っており、自分もそのような

医師に将来なりたいと感じた。その後、総合診療科のカンファレンスに参加し、各チームがお互いに情報を共有したり、意見を出し合ったりする様子を見学した。

3. 考察

研修前は、総合診療というと、どうしても他の診療科がそろっていない病院でプライマリ・ケアを行うというイメージが強かった。しかし、今回大学病院での総合診療科で研修し、他の診療科がそろっており、多くの専門医がいる病院での総合診療の必要性といったものを実感した。総合診療科では、まず振り分け外来をしないことでマルチな疾患を持った高齢者に対応できると感じた。今後、ますます高齢化が進んでいく日本では、マルチな疾患を待つ高齢者が病院に来ることが増えると予想される。そのため、他の専門科がある病院でも、総合診療が重要になってくると考えた。

また、プライマリ・ケアの点では、総合医で対応できる領域は対応し、できない領域は適切に専門医に依頼・コンサルテーションすることが重要だと改めて感じた。またそれでいて熟達した領域拡大し自分で診ることのできる範囲を広げていくために日々努力しなければならないと感じた。地域医療卒の学生として、将来大学病院で働くことも、地域の病院で働くこともあろうと思うので、どのような病院で働いたとしてもしっかりと患者を診ることのできる医師になりたい。

4. 謝辞

まず、今回の研修ではたくさんの方々にお世話になりました。お忙しい中、福地先生をはじめ多くのスタッフの皆様に、丁寧に温かくご指導いただき、誠にありがとうございました。

普段の臨床実習では経験のできない総合診療科での研修をさせていただいたり、移植を多く行っている血液内科で移植についてさまざまなことを教えていただいたり、大変貴重な経験をさせていただきました。今回学んだことを糧に、今後の臨床実習や勉学に励んでいきたいと思えます。本当にありがとうございました。

1. 研修施設とその地域の概要

- ・自治医科大学附属さいたま医療センター

標榜診療科：20科（内科、循環器内科、小児科、外科、脳神経外科、心臓血管外科、整形外科、泌尿器科、眼科、耳鼻咽喉科、産婦人科、皮膚科、形成外科、リハビリテーション科、麻酔科、放射線科、精神科、歯科口腔外科、病理診断科、救急科）

許可病床数：一般（571床）、ICU（18床）、CCU（12床）、NICU（9床）、MFICU（6床）、GCU（12床）

- ・埼玉県さいたま市大宮区の医療について

骨髄移植のドナー登録や関連施設のAED設置、さいたま市子ども急患電話相談などに力を入れている

2. 研修内容

研修初日、午前中に新幹線に乗って5、6時間後に自治医科大学附属さいたま医療センターに到着した。総合診療科を紹介いただいた後、医局を案内していただいた。

その後、総合診療科の教授である菅原先生に地域医療について講義していただいた。その後も、総合診療科のカンファレンスに参加し、現在入院している患者の疾患や状態、治療方針等について伺い、そのまま回診にも参加した。

2日目には、血液内科を見学した。午前には、和歌山県立医大出身である玉置先生に病院内の施設を案内していただいた。その後は、研修医の先生にお話を伺い、病院での勤務形態や雰囲気など、働き始めて感じていることなどを率直に教えていただいた。午後は総合診療科に戻り、勉強会に参加した。1時間から2時間ほどの間、色々教えてくださった。勉強会の後、再び血液内科にてカンファレンスに参加した。20人以上の患者についてプレゼンされていたが、それぞれ疾患の種類も状態も全く違う人ばかりで、考えることが多く大変そうなイメージであった。

また、その日の夜に、今回の研修でお世話になっていた福地先生に企画していただき、和歌山出身の先生方とのお食事会に参加した。和歌山時代のお話やこれからのキャリアについてのお話など、貴重なお話を伺うことができた。

最終日である3日目は、総合診療科にてチームについて、回診やカンファレンスなどに参加させていただいた。短い期間ではあったが、総合診療科、血液内科と2つの科を通じて疾患の診断や治療だけでなく、どのような医師になるか、患者との関わりについても学ぶことができた。

3. 考察

今回、私はさいたま医療センターで3日間お世話になったが、その中で和歌山県立医科大学とのさまざまな違いを感じることができた。初めに感じたのは、病院内の広さだった。和歌山に比べてさいたまの方は病院内が広く、それに対して外来患者数は少ないように感じた。また、診療科と医師の数も和歌山に比べて少なく、先生方も医者数が足りなくて、当直が多いとのことだった。

次に、回診時に1人の患者に対して先生が何人も聴診や診察をしていたことが印象的だった。まだ経験の少ない研修医の人たちにも積極的に診察に参加させていると感じ、すごく教育に力を入れているのだと思った。さらに、今回総合診療科と血液内科を回ったが、科同士の繋がりが強いと感じた。2日目に血液内科に行った時も、午前中に救急科のカンファレンスに参加する機会があり、そこで先生方が相談して意見を出し合っているのを見て、科を超えた繋がりがあるのだと感じた。

4. 謝辞

今回、地域医療枠夏季合同研修として、さいたま医療センターに3日間お世話になり、先生方には医療の知識だけでなく、病院の在り方や、地域医療についてなど大きな枠組みの話などもたくさんしていただきました。初日の講義や、3日間総合診療科に参加させていただいた菅原教授をはじめ、福地先生や総合診療科の先生方に感謝申し上げます。また、1日ではありましたが、病院内の案内等してくださいました玉置先生を初め、血液内科の先生方にも大変お世話になりました。3日という短い期間ではありましたが、お世話になりました皆様、本当にありがとうございました。今回得られた経験を、今後医師になった後も忘れずにしっかりと役立てていきたいと思っております。

2 地域医療夏季セミナー 2019 in ひょうご (公立香住病院・公立浜坂病院・県立丹波医療センター)

ひょうごの未来を築く7つの地域を体感

地域医療 夏季セミナー

2019 in ひょうご

日時 令和元年
8月22日(木)～24日(土)

会場 神戸大学医学部附属地域医療活性化センター
(兵庫県神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5)

対象者 地域医療に興味を持つ医学科生

定員 100名(定員に達し次第締め切らせていただきます)

参加費 23,000円程度(宿泊費・交通費を別途支給します)
※実負担額5,000円程度(予定)

申込 件名「夏季セミナー2019申込」・氏名(フリガナ)・性別・学校名・学年・メールアドレス・
電話番号をご記入の上、下記アドレスまでメールにてお申込みください
申込先 / dcme@med.kobe-u.ac.jp
申込締切日 / 6月21日(金)

● 行程表 ●
8/22(午前) オリエンテーション等の実施
8/22(午後)～8/24(午前) 7地区に分かれて研修
8/24(午後) 発表準備、発表

主催 神戸大学大学院地域医療教育学部門
兵庫県地域医療支援センター

共催 新温泉町、香美町、養父市、豊岡市、朝来市、丹波市、西脇市、宍粟市、赤穂市、姫路市

● 申込・問い合わせ先 ●

神戸大学大学院地域医療教育学部門 TEL.078-382-6732 FAX.078-382-6283
〒652-0032 兵庫県神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5 Email: dcme@med.kobe-u.ac.jp HP: http://www.med.kobe-u.ac.jp/dcme/

位置

公立香住病院：兵庫県美方郡香美町香住区若松 540

公立浜坂病院：兵庫県美方郡新温泉町二日市 184-1

県立丹波医療センター：兵庫県丹波市氷上町石生 2002-7

和歌山県立医科大学医学部地域医療科 5年生

塩谷 一樹

1. 研修施設とその地域の概要について

・公立香住病院

基本理念

1. みなさまの健康を守るために存在します。
2. 職員自らを高め、医療の質の向上をめざします。
3. 病院と地域の健全な発展のために貢献します。

病床数：50床

診療科目：内科、外科、泌尿器科、小児科、整形外科、耳鼻咽喉科、婦人科、人工透析

公立香住病院では、平成29年より一般病棟50床のうち、8床を地域包括ケア病床に変更した。香住・新温泉町ともに、高齢化率が非常に高い限界集落であり独居老人や老老介護が多い。そのため、老人ホームなど他の社会福祉施設までのつなぎや、介護疲れの解消に一時的に入院するといった目的で利用される機会が多い。

・公立浜坂病院

基本理念

浜坂病院の役割は「総合診療」「予防医学」「在宅医療」の三本柱である。

病床数：49床

診療科目：内科、整形外科、耳鼻咽喉科、泌尿器科、小児科、リハビリテーション科、禁煙外来、睡眠外来

公立浜坂病院も公立香住病院と同様に、49床中16床が地域包括ケア病床であり、高齢者の割合が高い。(現在はクロストリジウム菌検出により、病棟を閉鎖しており、病棟稼働率が低下している。)

2. 研修内容

・1日目

10:40 地域活性化センターにてオリエンテーション

11:00 兵庫県養成医師・医学生制度の概要

～昼食・移動・車内にて病院概要説明～

16:00 公立香住病院到着

17:00 住民交流会：在宅介護をしている2家族のお話を伺う。

・2日目

8:30 病院見学：外来・透析室・地域包括ケア病棟・病棟

～浜坂病院へ移動～

11:25 病院案内

～昼食・歓迎あいさつ等～

12:45 講話「地域医療の逆襲 ～EVOLUTION～」

「救急医療と在宅医療を通じた地域医療」

14:00 訪問診察

15:00 班別グループ討議

～移動～

18:15 地域住民との交流会（夕食：BBQ）

・3日目

～地域活性化センターへ移動・昼食～

13:30 班ごとに発表準備

15:30 発表会

3. 考察

今回、限界集落とされる地域での医療について見学し、そのなかで地域の方々のご意見をお聞きする機会が多くあった。特に、老老介護の形で在宅医療を実践されているご夫婦のお話が一番印象的であった。

そのご夫婦は、奥さんがほぼ寝たきりの旦那さんの介護（排痰や摘便など）を全て一人でなさっていた。近隣住民が自宅へ足を運んでくださることが多いらしく、いろいろと励ましの言葉などをかけてくださるそうである。そういった住民同士のつながりが、旦那さんの生きる活力になるだけでなく、奥さんの活力になっていた。家族の負担が大きい在宅医療において、介護を続けるための原動力は必要不可欠であり、こういった地域住民とのつながりこそがそれに当たるのではないかと感じた。逆に、核家族化により地域住民との交流が年々減少している都市部においては、このような地域の交流が難しいため、都市部での在宅医療実現は地域でのそれよりも実現しがたいものであるのかもしれないとも感じた。そういった点で、在宅医療を実現しやすい、というのは地域での医療における魅力の一つではないかと思う。

また、浜坂病院での講演会にて、「地域に必要とされている医師とは」、「総合診療内科医とは」、というご講演をお聞きした。その中で、「BPSモデル」という言葉があった。BPSとはBiology, Psychology, Socialの頭文字をとった言葉である。医学生の授業カリキュラムや、大学病院などの都市部の病院では、BiologyとPsychologyのみが重点化され、Socialは軽視されがちである。しかし、全人的な医療においては患者さんのSocialな面にも配慮することが重要であり、特に他の社会福祉施設や近隣住民とのかかわりが大きい地域医療においては、Socialな視点から医療を提供する姿勢が大事である。本来は都市部であっても、BPSモデルに基づいた全人的医療を患者さんに提供するべきであると思う。そういった点で、実際に地域で医師として働き、Socialな視点を身につけることは地域医療枠の医師に限らず、すべての医師にとって重要なことではないかと感じた。

4. 謝辞

今回の研修を通して、他県の地域医療の実情や地域医療に必要な姿勢など、多くの学びがありました。また、地域住民との交流や他大学の学生との交流からも考えさせられることが多くありました。地域医療研修としてこのような充実した研修を企画して下さった先生方、3日間にわたり指導して下さった神戸大学の先生方、研修に協力して下さった各病院の先生方をはじめスタッフの皆様、患者様に心から感謝いたします。この研修で得たことを、和歌山に還元できるようにこれからも勉学に励みたいと思います。ありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療科5年生

松尾 薫

1. 研修施設とその地域の概要

兵庫県丹波市は、兵庫県の西部に位置し、面積 870km² 人口 10 万人高齢化率 34.6% の地域である。住民運動“小児科を守る会”で全国的に有名になった地域であり、住民に、“地域で医療従事者を育てよう”という雰囲気がある地域である。

研修施設の丹波医療センターは県立柏原病院と柏原赤十字病院が統合再編して今年7月に新たにできた施設である。急性期の施設である丹波医療センターの隣に、柏原赤十字病院の働きを引き継ぎ、診療所の役割を果たすミルネ診療所が併設されている。

2. 研修内容

●研修日程

1 日目 (8月22日)

- 9:30～12:00 神戸大学地域医療活性化センターでのオリエンテーション
- 14:30～14:45 丹波医療センターでのオリエンテーション
- 14:50～16:45 医療体験研修 (エコー・心肺蘇生・採血)
- 16:45～17:00 先輩県養成医 (研修医) との懇談
- 17:00～17:30 丹波市長による講話
- 17:40～18:45 研修医・職員との交流会
- 19:30～ 地域住民の家にホームステイ・健康に対する聞き取り

2 日目 (8月23日)

- 9:00～ 9:30 丹波医療センター副院長による講話
- 9:30～10:15 地元出身職員へのインタビュー

- 10:15～10:30 先輩県養成医（専攻医）との懇談
- 10:40～12:30 グループ討議・発表（丹波市の医療課題とその解決策について）
- 13:40～15:40 神楽自治振興会「いきいき百歳体操」に参加
- 15:50～17:40 農業体験（野菜の植え付け）・アマゴのつかみ取り
- 18:30～20:30 丹波医療センター医師・地域医師・住民との交流会

3日目（8月24日）

- 9:00～10:30 丹波市氷上町成松区の「愛宕祭」を散策
- 13:10～ 地域医療活性化センターにて発表会オリエンテーション・発表会準備
- 15:30～18:00 発表会

3. 考察

今回の研修に参加するにあたり、和歌山と兵庫の地域医療における“地域性の違い”や中核病院の担う役割を学習目標として設定した。

今回の研修を経て、兵庫が各地域において医療圏が成り立っていること、その中でも丹波医療圏では柏原病院と柏原赤十字病院を合併した丹波医療センターがその地域のすべての医療を担っていることを学んだ。そこから、地域ならではの診療所の少なさ、交通の便の少なさ、医療センターの診療科の限界が問題となっていることに気付いた。さらに、センターの新設について周知が住民へ行き届いていない現状があると考えた。また、地域のなかでのつながりが深いからこそ、自身が地域医療を担う人材として地域に行くときには、溶け込む努力をする必要があると感じた。

4. 謝辞

丹波医療センターの見坂先生をはじめとする皆様、たくさんの研修を経験させていただいてありがとうございました。採血やエコー等、手技として大切なものを学ばせていただきました。また、神楽地区での農業体験をさせていただき、初めてアマゴを捕まえて食べることができました。3日目も愛宕祭の様子を見ることで、地域のつながりを感じることができました。有意義な3日間となりました。本当にありがとうございました。

3 下関市立豊田中央病院



位置 山口県下関市豊田町矢田 365-1

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠 5年生

井上 育美

私は今回山口県下関市豊田地区で研修した。この地区には電車は通っておらず、最寄り駅から車で30分ほどかかるところにあった。主な産業は農業ということで自然豊かな地域だった。まずはそのような地域を支えている豊田中央病院を案内して下さった。病床は71床あり、うち一般病棟60床（内、包括ケア病床15床）、療養病棟11床（休床）となっていた。診療科は、内科・外科・泌尿器科・整形外科・脳神経外科・小児科・眼科・リハビリテーション科があり、常勤医は十分でなく、他の病院から派遣されてきている状況だった。その中でも眼科には医師が常勤しており、診療スペースは広く、機器も揃っていた。ここでは白内障手術が受けられるということで、高齢化が進むこの地域のニーズに合っていると思った。

人口が少ないからこそ、人と人とのつながりを大切にされているように感じた。病院の職員の方々にご挨拶に伺った際にも、短い時間ではあったが丁寧に対応してくださり、職員同士仲が良く、病院が優しい雰囲気にも包まれていたのが印象的だった。優しさの源の1つには辺り一面の緑なのだろうと感じた。全方位を深い緑で囲まれていて、さらに田園や農地も広がっており、見渡す限りの心を癒す景色が魅力を生み出すのにつながっているのではないかと思う。院内見学の後、地域連携室にてその役割や、地域包括支援センターなど他の施設との違いを教えていただいた。役割分担が行われている中でも、市民の方からの相談などはどちらも受け付けているということで住民の方に開かれた施設であり住民の方々にとっては心強いららうと感じた。

また、デイケアの利用者さんの送迎にも同行した。医師から社会福祉協議会の方々などに診療情報を提供するだけでなく、反対にそのような施設の職員から医師に日々の体調の変化などの情報を報告しているということだった。送迎の中で、利用者の方々は一人暮らしであったり、病院から離れていたりと、気軽に病院にいける環境ではないことを知り、そのため日々の少しの変化が非常に重要で、役割の異なる様々な職種の人々が患者さん、利用者さんの情報を共有しあって、診療や介護に役立てることが重要であると感じた。利用者さんを家の玄関まで送り届けた後、今度は逆に利用者さんが玄関から庭先まで職員の方を見送りに出てこられることもあり、お互いの丁寧な接し方から信頼しあっていることを感じた。

当初8月28日から30日までの3日間の予定のところ、天候不良のため残念ながら8月29日の午前に研修中止となってしまい、短くも非常に充実した時間を送ることができました。研修の調整や受け入れをしてくださった山口県立総合医療センターの原田先生、横田さん、下関市立豊田中央病院の吉富院長先生、朝倉さんや職員の方々、社会福祉協議会の職員の方々、このような貴重な機会をいただき本当にありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療科 5年生

師玉 拓季

研修施設とその地区の内容

豊田地区は2005年に旧下関市等と合併し、現在下関市豊田町となっている。周囲を華山、霊峰狗留孫山など山々に囲まれており自然豊かな町である。人口は5,072人（平成31年3月31日時点）で、高齢化率は46.7%と非常に高い。鉄道が通っておらず、公共機関の利用も難しいために、訪問診療なども行っている。豊田中央病院は、病床数が一般病床45床、療養病床が26床で、診療科は内科（一般内科、循環器、消化器）、外科、泌尿器科、整形外科、脳神経外科、眼科がある。

研修内容

遠方での研修のため、1日目は午後から研修をさせていただきました。地域連携室で、豊田中央病院での業務内容や地域包括支援センター、社会福祉協議会の役割について教えていただきました。また、お話を伺う中で、現在、豊田町は高齢化率が高いため、介護や福祉の問題は避けて通れないものとなってきており、介護施設が必要であるが介護施設で働く人が少ないなど人口にかかわる問題もあると感じた。その後、訪問診療に同行した。患者さんは普段はケアマネージャーの方が薬剤管理をしている高齢男性であった。普段の研修で見学している診療とはまた異なり、採血やバイタルチェックのほか普段の生活の様子や体の調子、薬剤調整についてなど非常に細かくお話をされていた。患者さんが生活している場で、実際の生活の様子を想像できるのも、訪問診療の強みだと思った。

本来3日間の研修の予定だったが、九州地方を中心とした大雨の影響で、研修地域に避難勧告が発令されたため、2日目以降の研修は中止となった。

考察

天候のこともあり、短い研修となってしまったが、豊田地区についてや取り組みについて学ぶことができた。今回の研修で、地域医療に携わっている方は、その地域について精通しており、その土地に愛着をもっているということが伝わってきた。また、豊田中央病院では常勤の医師が約5名と少なく、その中で多くの患者さんを診察しようと思うと、幅広い知識や技術をもって診療できないといけないと実感した。今回感じたことをきっかけに、和歌山県の地域医療についても考え、よりよい医師となるべく、今後頑張っていきたいと思う。

謝辞

今回、研修を受け入れてくださった豊田中央病院の方々、スケジュールを組んでくださった豊田地区の関係者の方々、研修を企画してくださった地域医療支援センターの皆様に御礼申し上げます。予定より短い研修となり豊田地区についてもう少し知りたかったという気持ちもありますが、豊田地区の魅力に触れ、非常に有意義な研修となりました。本当にありがとうございました。

保健所研修

< 保健所研修の説明 >

令和元年7月22日(月)～26日(金)に地域医療枠1・2年生が7グループに分かれ、保健所で研修を行いました。それぞれの保健所では、保健所の概要説明や所長先生のお話などを聞き、保健所の事業を見学しました。



参加者名簿

和歌山県立医科大学医学部 地域医療枠

研修先	学年	氏名
橋本保健所	2年生	百名 孝太
	1年生	井上 弘康
岩出保健所	2年生	田中日向子
	1年生	和田 愛梨
海南保健所	2年生	井上 涼介
	2年生	行岡 翼
	1年生	浦崎 杏
湯浅保健所	2年生	田中 利佳
	1年生	岩田 拓巳
	1年生	北畑 亮歩

研修先	学年	氏名
御坊保健所	2年生	板谷 耀平
	1年生	西村 加奈
田辺保健所	1年生	山路 千咲
	2年生	塩塚 諒
新宮保健所	1年生	山下 光
	2年生	高橋 文太
	1年生	濱田琳太郎
	1年生	淵脇 颯太

1 橋本保健所



位 置 和歌山県橋本市高野口町名古屋 927

和歌山県立医科大学医学部地域医療科 2 年生

百名 孝太

1. 研修を行った保健所が管轄する地域の概要

和歌山県の北東県境に位置し、北に大阪府河内長野市、東に奈良県五條市と境界を接する。旧高野口町にあった 2 つの飛地が解消されないまま合併したため、現在もかつらぎ町内と九度山町内に飛地がある。和歌山県で唯一大阪都市圏（都市雇用圏）に含まれる市で、いわゆる和歌山府民が多い。紀の川中流に位置し、かつては材木運搬、高野山宿場町として栄えた。平成 22 年国勢調査（速報値）より前回調査からの人口増減をみると、3.16% 減の 66,362 人であり、増減率は県内 30 市町村中 6 位である。

2. 当日の研修内容

所長から橋本市の保健所の役割や、医療がどのように保健所に関わっているか、教わった。また、施設内の案内もしていただいた。続いて、副所長の方から和歌山県の人口減少を、実際の人口調査のグラフを含めた様々な資料と共に教えていただいた。そのほか、施設の方からは障害者支援や感染症対策など、保健所が担う役割について教わった。また、午後からは在宅支援に同行し、ご年配の方ではぼ寝たきり状態の方の介護用品の支援や援助金をもらう為に必要な書類を渡したりしていた。ここで、ご年配の方と手続きに必要な会話以外にも、「体の調子はどうですか」といった気遣いや、雑談をするなど、寝たきりでなかなかたくさんの人とコミュニケーションがとれない不自由さについてもケアをしていた。

3. 考察

今回の研修では実際に保健所の役割や橋本市、ひいては和歌山県が抱える問題について知識を深めることができ、また実際に在宅支援の現場を見ることができ、コミュニケーション能力の大切さやご年配の方が抱える問題について触れることができた。この先、医師になって地域医療に関わっていく中で、こうした介護用品の種類や工夫、またご年配の方の生活上の問題を少しでも和らげるような医師になりたいと考える。そのためには今回のような経験は貴重なものとなった。

4. 謝辞

最後になりますが、今回の研修を企画してくださった所長始め、橋本保健所の方々には地域医療に携わっていく上で貴重な経験をさせていただき、本当にありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療科 1 年生

井上 弘康

1. 研修施設とその地域の概要

橋本保健所が管轄する橋本医療圏は、橋本市、かつらぎ町、九度山町および高野町の 1 市 3 町からなり、県の北東部に位置し、総面積は 463.24km² で県面積の約 9.8% を占めている。

平成 31 年 4 月 1 日の時点での推計人口は 84384 人であり、前年と比べて、1148 人減少している。世帯数は 33025 世帯であり、一世帯当たりの人口は約 2.6 人である。65 歳以上の高齢化率は 2015 年時点で 31.60% であり、全国平均の 26.60%、県平均の 30.90% をともに上回っている。2010 年から 2015 年までの人口増加率は -5.55% であり、全国の -0.75%、県の -3.85% をともに下回っている。橋本保健所は総務健康安全課、保健福祉課、衛生環境課

の3つに分かれている。総務健康安全課では庶務、経理、生活保護、災害救助、戦傷病者・戦没者遺族の援護、感染症予防、結核予防、医療監視、人口動態など、保健福祉課では身体障害者福祉、知的障害者福祉、特別障害者福祉、精神保護・精神障害者福祉、難病患者対策、老人福祉、老人保護、介護保険、栄養改善、歯科保健など、衛生環境課では、食品衛生、狂犬病予防、動物愛護、温泉利用、生活衛生、環境保全・廃棄物、自然公園、鳥獣保護、薬事、毒物・劇物、薬物乱用防止などを行っている。

2. 研修内容

○午前の部

最初に所長様から保健所における公衆衛生活動について説明していただいた。公衆衛生とは生活の質を保持・恒常させるためにみんなの健康をみんなで守る保健医療の組織的な営みのことであるとおっしゃっていた。次に橋本保健所の各課の課長様からそれぞれの課の業務について説明していただいた。

○午後の部

保健師が難病の患者様のお宅に経過観察と難病の更新資料配布のために伺うのに同行させていただいた。

3. 考察

保健所研修を行うまでは保健所という物自体を知らなかったもので、保健所の役割や仕事など初めて知ったことも多かった。保健師が患者様に経過観察を行う際に、患者様の状況を伺いながらも適度に雑談を挟みつつ、しかしながら必要な事項を聞き出していく話術に感動した。しゃべり方も敬語を使う時と使わない時を混ぜ、表情や声のトーンなどで患者様が気持ちの良い会話ができるように調節できていた。医師も将来、患者とのコミュニケーションは必須なので実際の現場の様子を知ることができてよかった。

4. 謝辞

今回の保健所研修のために貴重な時間を割いて準備して下さった橋本保健所の皆様、医学生のためならと、快く訪問をうけて下さった患者様、この研修を計画して下さった地域医療支援センターの先生方にお礼申し上げます。今後自分が医師として成長していく中で非常にいい体験をさせていただきました。ありがとうございました。

2 岩出保健所



位 置 和歌山県岩出市高塚 209

和歌山県立医科大学医学部地域医療科 2 年生

田中 日向子

1. 研修施設とその地域の概要

保健所は、地域保健法（平成6年）によって定められており、岩出保健所のような都道府県保健所は地域保健の広域的、専門的、技術的拠点としての機能強化が図られている。保健所は市町村への援助と保健、医療、福祉について地域全体像の公衆衛生的な施策を推進する。和歌山県には8つの都道府県保健所と和歌山市の市型保健所がある。岩出保健所の職員数は39名であり、総務健康安全課、保健福祉課、衛星環境課の3課からなる。総務健康安全課では、生活保護や感染症の予防結核予防対策などの業務を行っている。保健福祉課には、高齢障害保健福祉グループと健康、子ども家庭グループにの2つのグループがあり、前者では身体障害者福祉や精神保健福祉などの業務を、後者では、母子保健、難病患者対策、原爆被爆者援護などの業務を行っ

ている。衛生環境課では、食品衛生、狂犬病予防及び動物の保護、管理などの業務を行っている。岩出保健所の管轄区域は、紀の川市と岩出市であり、面積は 266.72 平方キロメートル（県面積の約 5.6%）で、人口は 113,072 人（平成 31 年 4 月）である。那賀地方には、数多くの史跡や紀の川や貴志川が育んだ肥沃な平野がある。その一方で、関西空港から至近距離に位置することから、和歌山県の表玄関として発展する可能性を秘めており、現在では、府県間道路や京奈和自動車道などの交通網の整備が進められている。岩出市の平均寿命と健康寿命は和歌山県全体よりも高位であるが、全国的には低位である。岩出市の死亡状況について、一位は悪性新生物で二位は自殺、三位は脳血管疾患である。紀の川市には 4 つの病院と 64 の診療所があり、岩出市には 4 つの病院と 43 の診療所がある。

2. 研修内容

今回の保健所研修のプログラムとして、午前中は、保健所にて、保健所についての説明や保健福祉課と精神保健福祉の業務の説明を受けた他、障害者サービスや今回訪問させて頂いた社会福祉法人筍憩会わかばやひきこもり者社会参加支援センター事業麦の郷ハートフルハウス創についての説明を受けた。午後は創とわかばの見学をさせて頂いた後、結核感染症対策業務についての説明を受け、結核診査会に出席した。その後、衛生環境課の業務について説明を受けた。岩出保健所の管内の精神障害者の蒸気機関車は、自律性支援医療受給者が計 1177 名、精神障害者保健福祉手帳を持っている人が 804 名である。保健所の取り組みとして、精神保健福祉講演会や、那賀地方精神障害者大運動会の開催、未成年者を対象とした薬物アルコール予防教室、医療機関を受診できずに悩んでいる人を対象としたこころの健康相談などがある。ひきこもり地域支援センターは、日本全国に 19 施設あり、ひきこもり本人や家族からの相談を受けたり、地域におけるひきこもりに係わる関係機関、事業紹介などの情報発信を行っている。創では、相談や訪問支援の他、自宅以外の居場所となる場や活動の場の提供、自治活動の支援、中間的就労の場の提供を行っている。わかばは就労継続支援 B 型事業（就労機会と生産活動を通じて次のステップを目指すためのサービス）と指定特定相談支援事業を行っている。私たちが見学させて頂いた時は洗濯ハンガーの組み立てやシール貼り、梱包などの作業をなさっていた。結核診査委員会では、結核患者の方が住んでいる地域の保健所の所長の他、医師や弁護士などが参加し、公費負担申請について決定していた。

3. 考察

研修を通して、保健所の業務が多岐にわたることを感じた。食品安全や災害対策業務など、全ての人に係わる業務の他、障害者支援や結核患者の公費負担申請など個人に係わる業務があることを知った。また、今回訪問させて頂いた創やわかばでは、ひきこもりの方や障害者の方と地域の関わりの必要性を感じた。私たちの住んでいる地域の中には、支援を必要としている

人がいて、地域で支え合うことが大切だし、その地域にすむ色々な人が交流する場があることで、その人達を理解することができるのだと思った。患者さん個人だけでなく、患者さんの住む環境のことも理解できる医師になりたいと思った。

4. 謝辞

雑賀所長をはじめとする岩出保健所の職員の方々や、創、わかばのスタッフの方々、地域支援医療センターの方々、またお世話になった多くの方々に厚くお礼申し上げます。参加させて頂いた研修を通して、保健所の役割について知るだけでなく、地域の人々の生活など普段知ることができないことを知ることができました。今回研修で得ることができた知識や経験を活かし、患者さんのことを理解できる医師になるためにさらに努力を重ねていきたいと思っております。本当にありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療科 2 年生

三並 桃佳

研修施設とその地域の概要

今回研修させて頂いた岩出保健所は和歌山県岩出市高塚に位置し、紀の川市と岩出市を管轄している。管轄区域の面積は県面積の約 5.6%、人口は県全体の 12.2% を占め、1 年間の人口推計について紀の川市では約 900 人増加している。那賀地方はいにしえから大和街道や淡路街道等の交通の要所として発展した地域であり、今では関西国際空港から約 20km の至近距離に位置し、和歌山県の表玄関として発展する可能性を秘めている。また、岩出保健所は総務健康安全課、保健福祉課、衛生環境課の 3 つの部からなり、総勢 39 名の職員の方が働いている。

研修内容

午前中は保健所長、総務健康安全課、保健福祉課、精神保健福祉業務の職員の方々からお話を伺い、保健医療の状況や業務について教えて頂いた。午後は所長、P S W (精神保健福祉士) の方、保健師の方とともに精神障害を持つ方の作業所を見学させて頂き、結核審査会に出席させて頂いた後に衛生環境課の業務について説明をして頂いた。保健医療については健康づくりの難しさについて教えて頂き、健康づくりはすぐに成果が見えることではないため、時間をかけることが大切だとおっしゃっていた。昼食は以前引きこもりだった方が主に働いていらっしゃるカフェで頂いた。様々な理由で引きこもりになった人が社会で働くための中間的な就労の場として役立っている様子が伺えた。作業所見学では、シールを貼ったり、商品を組み立てたりする様子を見たり、PSW でもある施設長の方からお話を聞いた。結核審査会では岩出・橋本・海南・湯浅保健所の

所長や放射線技師の方が集まり、患者さんのレントゲン写真や報告を聞いて診断結果の適正性や治療に使用する薬剤・治療期間などについて協議し、公費負担申請が適正化否かを判断する。入院による治療の場合は医療費を全額負担し、通院の場合は 95%負担する。

考察

今回の研修では、保健所の役割は本当に多岐にわたるということである。私は普段暮らしてきて保健所が何をしているところなのかあまり考えたことはなかったが、健康づくりや動物の保護・管理、献血や骨髄バンクの啓発、障害者福祉など様々な分野に関わり、どの事業でも根本には地域の人が快適に暮らせるように、ということがあると実感できた。また、結核審査会では、患者さんの診断は病院の中でのみ行うと思っていたが、感染症となると保健所と一緒に今後の治療方法などを決定するのだな、と知った。

謝辞

今回の研修では雑賀保健所長、保健所職員の方、見学をさせて頂いた施設の方々の皆様から多くのことを学ぶことができました。得た知識や実際に見て、聞いて感じたことは必ず将来活かせると思います。また、このような有意義な研修に参加する機会を与えてくださった地域医療支援センターの皆様に感謝申し上げます。

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠 1 年生

和田 愛梨

研修施設とその地域の概要

今回研修させていただいた岩出保健所は総務健康安全課、保健福祉課、衛生環境課の 3 つの部署から成り立ち、その中でも保健福祉課は高齢・障害保健福祉グループと健康・子供家庭グループの 2 つに分かれている。管轄区域は岩出市と紀の川市であり、管轄域の面積は 266.72 km²で県面積の約 5.6%を占め、管轄人口は平成 31 年 4 月 1 日現在で県全体の 12.2%にあたる 113,072 人である。この地域は関西国際空港から約 20kmと大阪府に非常に近く、府県間道路や京奈和自動車道などの道路交通網が整っていることもあり他の地域と比較して若い世代の人が多く、高齢人口比率も 26.8% (平成 30 年度) と県全体の 31.5%を大きく下回っていることが特徴である。

研修内容

まず、保健所研修の目標と内容について雑賀博子所長より簡単に説明を受けた。午前中は保

健所の組織と役割、総務健康安全課と保健福祉課の業務内容や管内の保健医療の状況について講義を受けたほか、保健所の医師の役割や精神保健福祉業務について学んだ。その後、引きこもりを経験したという過去を持つ人たちが店員を務める創カフェという所を訪問し、テレビ番組で紹介されている様子を見せていただいた。引きこもりで悩んでいる人たちが社会に出ていけるきっかけを作る場がいかに必要かを知ることができた。そして午後からは精神障害や知的障害などを持つ人を受け入れているわかば作業所を訪問して職員の方にお話を伺った。その後は結核及び感染症対策業務や衛生環境課の業務についての講義を受けたり、結核審査会に参加したりした。

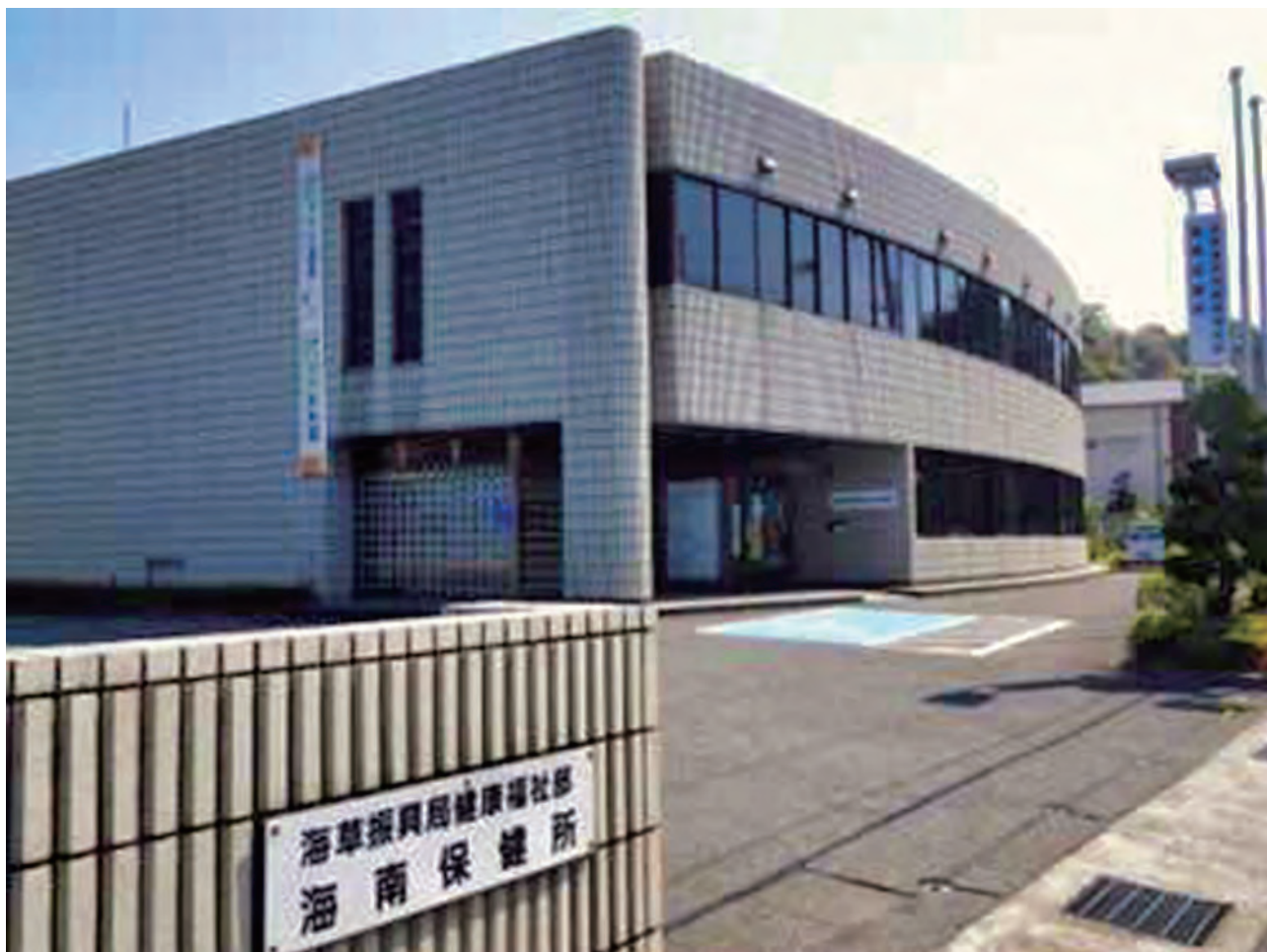
考察

今回の保健所研修を通して、保健所は医療はもちろんのこと、福祉や公衆衛生など様々な面で私たちのことをサポートしていることを知ることができた。将来医師として働く上で病院などの医療機関と保健所がどのように連携しているかを学ぶことができたのはとても良い経験になったと思う。病院が主に病気の人を対象としているのに対し、保健所はすべての人に対して生涯を通して支援を行っており、その重要性を改めて実感した。私も地域医療卒の学生として、地域医療に貢献できるよう精進していきたいと思う。

謝辞

最後になりましたが、今回私たちのためにお忙しい中時間を作ってくださいました雑賀博子所長をはじめ、岩出保健所の皆様には大変お世話になりました。そしてこの研修を企画して下さった地域医療支援センターの方々にお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

3 海南保健所



位 置 和歌山県海南市大野中 939

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠 2 年生

井上 涼介

1. 研修施設とその地域の概要

今回の研修で私は海草振興局健康福祉部（海南保健所）を見学した。海南保健所の管轄区域は海南市及び海草郡であり、いずれの地域も人口減少と高齢化が進行しているのが特徴である。海南保健所は現在 3 課 5 グループの体制で業務を行っており、約 6 万人の地域住民の健康・衛生を支えている。具体的な業務としては、地域住民への健康に関する知識の啓発やインフラ整備、結核や感染症の予防活動、障がいや難病を抱える人やその家族への支援、また児童や母子に対する支援などがある。

2. 研修内容

まず保健所長から地域包括ケアや介護保険が目指すケアについてオリエンテーションを受けた。その後、保健所内にある細菌検査室で大腸菌の培地を実際に作らせてもらい、どのようにして検査を行うか、また検査における注意点などを教えていただいた。

午後からは、らそ恵友というデイサービス施設を見学した。デイサービス施設は場所によって特徴があるが、この施設は特に運動を重視しており、個人の力や体力に合わせたリハビリが行われていた。また、ただ体を動かすだけでなく、並行して別の動作も行うことで認知症の予防や悪化を防ぐことも行われていた。次に恵友病院の院長である上田先生と在宅医療・介護連携サポートセンターの職員の方と病院内で意見交換会を行った。

上田先生からは主に、地域の病院と大学病院との連携がどのように行われているか、その中で地域の病院が果たす役割とは何かといったことについて教えていただいた。また、地域の病院で働く医師としての患者さんとの関わり方や、患者の要望を叶えるには他の医療従事者との連携が不可欠ということも教えていただいた。その後、病院に併設されているグループホームを見学させてもらった。木造の落ち着いた空間で、屋上では野菜も栽培しており、入居者の方がゆっくりと過ごしていることが感じ取れた。

3. 考察

保健所の業務の見学だけでなく体験までさせていただいたことで、より保健所で行われていることが理解できた。さらに、保健所だけでなく、デイサービス施設や地域の中核となっている病院の仕事も見学させていただいたことで、地域医療において、どのようにして医療従事者間の連携が取られているのか、その連携の中で医師はどのような役割を果たしているのかといったことを肌で感じることができた。また、研修を通して特に印象深かったことは、どの職種の方も熱意を持って患者のために働いていることだ。当たり前のようなことではあるが、患者のことを第1に考えて仕事をするという姿勢は大切なことだと再認識することが出来た。

4. 謝辞

今回、海南保健所で普段見ることの出来ない保健所や病院の仕事を見学させてもらったことは、とても貴重な経験となりました。この研修で得た経験は必ず今後活かしていけると思います。海南保健所の所長、また職員の皆様このような学習の場を設けていただき本当にありがとうございました。

1. 海南市の概要

海南市は、平成 17 年 4 月に旧海南市と旧下津町が合併して誕生した、人口 50629 人（令和元年 7 月）の市であり、和歌山県の北西部に位置する。海や山などの自然に囲まれ、四季を通し温暖な気候に恵まれているため、山間部では、みかん、びわ、桃などの果物の栽培、紀伊水道に臨む沿岸部では、シラスやハモ、ワカメなどの海の幸にも恵まれている。さらに、黒江地区周辺では、日本四大漆器のひとつに含まれる「紀州漆器」の産地として知られ、伝統工芸品としても有名である。その反面、海南市の高齢化率（65 歳以上が人口を占める割合）は 34.20%（2015 年 JMAP）であり、全国平均の 26.60%（2015 年 JMAP）を大きく上回っており、海南市併せて和歌山県全体でも高齢化が大きな問題となっている。高齢者の増加によって、医療制度の改革や、訪問介護やデイサービスなどの支援を必要とする人が年々増加しており、そのような地域社会に対処することのできる体制づくりが進められている。

2. 研修内容

・ 9 : 00 ~ 10 : 30 施設の説明

まず、保健所長によって、海南市保健所の地域での役割や責任についての話を伺った。また、医師であり研究に邁進していた方が、どういう経緯で保健所長になるに至ったのか、そして、現在どういう目的を持って、またどんな役割を果たしているのかという私たちに将来、直接関わりがあり得ることについての話を、医学的知識を交えながらわかりやすく教えていただいた。

その後、健康福祉部の方から、今後の高齢者の生活課題を考えると地域ぐるみで包括的、継続的にサポートしていくといった地域包括ケアシステムの重要性や、現在の介護保険制度を踏まえた上で、介護保険が目指すケアの考え方について教えていただいた。

・ 10 : 30 ~ 12 : 00 細菌の培地体験

保健所では、食中毒が発生した店などの食事を検査したり、検便を実施したりしている。これらの検査方法について、自分たちで実際に培地を作り、調査方法について学ばせていただいた。

・ 13 : 00 ~ 16 : 00 管轄内の病院、デイサービス、グループホームへの見学

海南市の医療を担っている恵友病院に見学させていただき、実際に直面している課題や、忙しい中でも大切にすべきことを聞かせていただいた。また、デイサービスやグループホームを見学させていただき、直接、高齢者の人とお話しさせていただいたり、介護場面での大変さなどを教えていただいた。

3. 考察

海南市保健所や、管轄内の病院では、高齢化が進み地域包括ケアを進める必要があるという

課題に対して、行政が動く前から、職員一人一人が主体的に対処できるよう、意見交換の機会を設けたり、高齢者の自宅を直接訪問するなど一般の業務に加え、自ら行動するといった自主性が重んじられていた。一人ひとりが、何が足りていないのか、何が日打つようなのかを考え周りに共有しながら行動に起こすことが、課題を解決するためには必要だと感じた。また、最近の医療技術の発達とともに、平均寿命が延びたことで長生きにつながっている。元気なまま年を取ってもらうためにも、私が将来和歌山県内の医師となった時には、保健所やデイサービスセンターなどの様々な機関と情報を共有しながら、疾患の予防や、病気の治療に限らず、回復するまでの支援もサポートする体制づくりがもっと必要だと感じた。

4. 謝辞

最後に、今回の保健所研修や恵友病院やその施設の見学のために、貴重なお時間を割いてくださった各関係者の皆様、そしてこの研修を計画してくださった地域医療支援センターの先生方にお礼申し上げます。この経験を活かし、将来和歌山県の医師として精進して参りたいと思います。貴重な経験、ありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠 1 年生

浦崎 杏

1. 研修施設とその地域の概要

今回研修させていただいた海南保健所は、和歌山県海南市に位置している。海南保健所は海南市及び海草郡の 1 市 3 町を管轄する農村型保健所として地域保健衛生のセンター的役割を果たしてきたが、時代の進展とともに、保健衛生行政に対する需要はますます複雑多様化し、これに対応する効率的な業務を推進するため、昭和 62 年に海南市大野中に新築移転した。また、平成 9 年には海草福祉事務所が当初に移転し、保健・医療・福祉部門の連携強化を図り、平成 10 年には「地方振興局」を設置した際、保健所と福祉事務所とを一体化して「健康福祉部」として現在に至っている。

2. 研修内容

まず初めに、地域包括ケアシステムや介護保険が目指すケアの考え方についての講義を受けた。地域包括ケアが求められる背景や、地域包括ケアシステムの構築など、様々なことについて分かりやすい説明をしていただいた。所長の講義を受けた後は細菌検査概要説明を受けた。実際に細菌を見せていただきながらの説明だったので、充実した時間を送ることができた。午

後の初めには、らそ恵友に移動してデイサービスの見学をした。高齢者の方たちと一緒に認知症予防の体操などを行った。デイサービスを後にし、恵友病院にて院長及び在宅医療・介護連携サポートセンター職員との意見交換会を行った。意見交換だけでなく、介護の実態などについても詳しい説明を受けることができた。研修最後にはグループホームの見学をした。グループホームについて説明を受け、少しだったがグループホームにいた方々とお話をする機会にも恵まれた。グループホーム見学後には海南保健所に戻り、保健所長と一日の研修内容を振り返った。

3. 考察

今回の研修を通して、保健所がいかに地域保健を支えている存在であるのかを改めて感じることができた。和歌山県における高齢化の割合などについても知識としては持っているつもりでいたが、実際に講義を受け、様々な体験をしたことでより深く理解することができた。

4. 謝辞

今回の研修では海南保健所の皆様にはお忙しい中、大変お世話になりました。今回の研修を通してこれまで知らなかったことや、病院では見ることができない地域の方々の現状についても知ることができ、とても充実した時間を送ることができました。地域医療卒の学生として、より一層勉学に励み、将来地域に貢献できる医師になりたいと強く感じました。今回このような場を設定していただき、誠にありがとうございました。

4 湯浅保健所



位 置 和歌山県有田郡湯浅町湯浅 2355 - 1

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠 2 年生
田中 利佳

1. 研修施設とその地域の概要

湯浅保健所とは有田振興局健康福祉部のことであり、有田川町、有田市、湯浅町、広川町の住民を対象に保健衛生、福祉医療、環境関係の業務、具体的には一般健康相談、精神障害者、身体障害者、知的障害者に対する各種支援や在宅福祉、老人福祉にかかる施設整備、検便やHIV検査などを行なっている。管轄下の市町村はいずれも高齢化率が高く、癌検診や特定健診などの受診率が低いことが特徴である。

2. 研修内容

午前中は保健所の理念や仕事内容などを説明していただき、学校給食センターを原因とした

大規模食中毒発生時の危機管理体制を整備するための検討会を見学させていただいた。

午後は民間の方向けの健康推進員養成講習会オリエンテーションに参加し、生活習慣予防について楠本内科医院の院長であられる栗山先生の講義を、その後運動について北出病院の田中先生の講義を、民間の方と一緒に聞いてもらった。栗山先生には、生活習慣病そのものについての分かりやすく砕いた説明から、その病気について医療的な治療法だけでなく日常自分で注意していくべき事、予防になる行動などを具体的に教えていただき、田中先生の講座では、身体だけでなく頭も活性化する体操を体験した。

3. 考察

和歌山県の小学校の給食を管理する方々を中心とした検討会では、食中毒と思われる事態が発生した際、その原因や経路の推測をし、それをいかに迅速に確定に移行させ対処するかが大切かを学ばせていただいた。様々な検討すべき事項はあるが、保健所がマニュアルを作成すると決定し、各市町村の連携による危機管理体制を整えることの大切さを知った。

午後の講習会は、高齢化や生活習慣病などに伴う和歌山県全体としての問題に取り組むといった健康増進計画に沿って、有田市の地方版としてその一端を担うオレンジパワープランに必要となっていく健康推進員の養成といった趣旨のオリエンテーションだった。行政だけでは目が配りきれない地域の中にも、限りなく密着する形でより良い健康についての認識を浸透させる工夫がなされていることを知った。

栗山先生の講義では、食事はなぜ野菜から食べるのがいいのか、アルコールや喫煙がなぜ体に悪いのか、実際どう体を変化させてしまうのかなど私たちが日常生活によく出くわす場面からの健康問題を学ばせていただき、日々の生活習慣がどれだけ自分の体調に直接表れてくるのかを教えていただいた。健康運動指導士である田中先生の講座では、日常的な動きに近い体操ができない時の若干の焦りと慣れてくるに従いできるようになる楽しさを感じ、日常でもチャレンジしたくなるように工夫されていることを感じた。オリエンテーション全体として、地域住民の方とともに健康についての知識を深め、考え直す機会をいただいた。

4. 謝辞

一日見学させていただいただけでも、保健所では様々な人に向けて多様な活動が行われていることを感じました。所長の松本先生をはじめ、今回の保健所研修のためにお忙しい中貴重なお時間を割いてくださった湯浅保健所の職員の皆様、研修を計画してくださった地域医療支援センターの先生方にお礼申し上げます。貴重な体験をさせてくださり、ありがとうございました。

1. 研修施設とその地域の概要

湯浅保健所が、管轄する区域は有田市、湯浅町、広川町、有田川町である。そのカバーする範囲は、総面積 474.86 k m² で平成 29 年においては、72,338 人が管轄する区域に住んでいる。管内における高齢者人口比率は 31.6% である。これは和歌山県の比率、30.9% を上回っており、今後、高齢化はさらに進んでいくことが見込まれる。平成 28 年の時点で、管内保健師就業状況は、保健所に 7 名、有田市に 10 名、広川町に 5 名、有田川町に 12 名である。保健所保健師は、市町保健師他関係機関と連携をとりながら、保護・福祉サービスを提供している。湯浅保健所には、総務安全健康課、保健福祉課、衛生環境課があり、それぞれ生活保護、感染症、介護、健康作り、環境衛生などを分担して受け持っている。

2. 研修内容

[午前の部]

「学校給食センターを原因とした食中毒等発生時の危機管理体制を整備するための検討会」を見学した。数年前に御坊で給食センターを原因とする食中毒が発生した。今後、似たようなことが起きた時に、迅速に対応を行うためになにをすればよいかを御坊でのことを例として、管内の給食センターの方々や教育委員会の方々などが集まり議論した。給食センターでは学校の給食の大半を調理していることから、食中毒が発生すると、給食を食べた生徒はもちろん、そのご家庭に拡大する恐れも考えられる。よって、発生した際には迅速な対応が必要不可欠である。提案としては、「保健師の数が少ないので、事前に何か起きた時に各市町村から 1 名保健師を派遣することを決めたらどうか」ということが挙げられた。また、「家庭における二次感染防止について」湯浅保健所衛生環境課からの講義があり、ノロウイルスへの対策や嘔吐物・下痢便の処理の仕方などを聞いた。

[午後の部]

健康推進員養成講習会に参加させていただいた。講習会では、生活習慣病予防についての話を有田市医師会、楠本内科医院の院長：栗山医師からの講義があった。講習会にきている方々は高齢の女性だった。また、後半は家の中でもできる運動について、北出病院のメディカル&フィットネスアクオの健康運動指導士より指導があった。実際に体を動かして実践してみるとどれも気軽にできた。家庭に帰って、家族みんなで楽しくできるような内容であった。

3. 考察

今回の研修に取り組む前は、保健所が何をしているのかについてあまり理解していなかった。

しかし、研修を通じて、保健所が地域住民の安全や安心を守るために様々な活動を行っていることを知った。午前の検討会では、起こった後のことを各市町村の方々が集まって話しあっており、予防についてだけでなく、発生後についても対策を考えていることを知った。起こってみないとわからない中で、発生後のことを考えることは難しいが、参加者全員で知恵を振り絞り、様々なことを想定している様子から、保健所の使命を実際に見ることができたように思う。午後の講習会では、少子高齢化が進み、高齢者の方々が増えることを踏まえた上での話が多かった。そのときの状況に合わせて、保健所が行う活動の重点が変わるが、根本にあるのは地域住民の生命を守ることであることを理解した。早い段階から、保健所がしている活動を知ることができてよかった。今後、学んだことを活かしていこうと思う。

4. 謝辞

最後になりましたが、この度、私たちのために貴重な時間を割いていただき、ありがとうございました。また、このような研修の機会を作ってくださった地域医療支援センターの先生方にお礼申し上げます。今回、学ばせていただいたことを今後に役立てたいと考えます。

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠 1 年生

北畑 亮歩

1. 研修施設とその地域の概要

湯浅保健所では各種健康診断や相談事業を行っており、一般の健康相談からこころの健康相談まで行っている。また、健康福祉部では、人々が安心してくらするように保健衛生、福祉医療、環境関係の業務を行っている。

また、湯浅町は和歌山県の北西部に位置している。人口は年々減少し、高齢者も増えてきている。人口は 12,205 人、世帯数 4760 世帯（平成 27 年 10 月）である。

2. 研修内容

今回の研修では、午前は「学校給食センターを原因とした食中毒等発生時の危機管理体制を整備するための検討会」を見学し、午後は、「健康推進員養成講習会プログラム」に参加した。

まず、午前の検討会では、給食センターを原因とする食中毒が数年前に発生し、今後発生時に感染拡大防止策の整備を講じるためのものであった。給食センターの方や教育委員会の方などあらゆる方があつまり、防止策について話し合っていた。学校の給食の大半は給食センターで調理されているため、ひとたび食中毒が発生すると被害が大規模化することが想定されるため、このような検討会が重要なんだと感じた。

次に、午後は生活習慣病予防に関する内容を医師の方が講義してくれた。参加していた人は全員が高齢者だった。また、後半は運動指導士の方が軽い運動を交えて普段からできる健康運動について教えてくれた。高齢者の方にとっては、家の中でもできるため、とてもためになる講義であると感じた。

3. 考察

今回の研修で保健所の働きについて学ぶことができた。保健所は地域住民の安全や生命を守るために必要不可欠だと学んだ。また、午前の検討会など、地域住民の方やさまざまな職種の人が集まって議題に取り組むことが印象的だった。午後の講義では、参加者が全員高齢者という点を踏まえて、先生方が講義をされていた。高齢者が増えていく中で、保健所の役割も昔からだんだん変化し、主に高齢者の健康面がとても重要になると感じた。今回、保健所には初めて行かせていただき、保健所の機能についてや仕事内容などを知ることができた。本当に貴重な時間を過ごすことができ、今回学んだことを今後活かしていきたいと思う。

4. 謝辞

最後になりましたが、お忙しい中お時間を割いてくださった湯浅保健所の皆様には大変お世話になりました。本当にありがとうございました。

5 御坊保健所



位 置 和歌山県御坊市湯川町財部 859 - 2

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠 2 年生

板谷 耀平

1. 研修施設とその地域の概要

今回私が研修させていただいたのは御坊保健所であり、和歌山県日高振興局健康福祉部ともいわれる。御坊保健所には総務健康安全課、保健福祉課、衛生環境課に分かれており、さらに担当分野が分かれている。管轄区域としては、御坊市、美浜町、日高町、由良町、印南町、日高川町である。日高川町は 2005 年に川辺町、中津村、美山村が合併してできた町である。和歌山県福祉保健部福祉保健政策局長寿社会課の平成 30 年度和歌山県における高齢化の状況によると、高齢化率は御坊市が 30.1%、美浜町が 34.5%、日高町が 29.3%、由良町が 36.5%、印南町が 34.6%、日高川町が 34.4% である。和歌山県全体の高齢化率は 31.5% であることから 4 つの町において平均よりも高齢化率が高くなっている。しかし、これらの地域の中では人

口が最も多いのは御坊市であることから高齢者数は御坊市が最も多い。当保健所の管轄区域における公的病院としては御坊市に国保日高総合病院、美浜町に独立行政法人国立病院機構和歌山病院がある。和歌山病院には和歌山県下で唯一の結核の入院病床がある。美浜町には日本の白砂青松 100 選に選ばれている煙樹ヶ浜があり、日高川の河口から約 4km にわたり砂利の海岸が続いており、その背後には松林がある。

2. 研修内容

日時：令和元年 7 月 26 日(金)

9：00～9：30 朝礼・オリエンテーション

オリエンテーションでは形部裕昭保健所長により今回の研修内容や、公衆衛生とは何かの説明を受けた。朝礼では各課がこの日どのようなことを行うのかを発表するところを見学し、朝礼後に各課がどのような仕事をしているのか紹介していただいた。

10：00～11：30 御坊広域清掃センター・御坊クリーンセンター見学

所長と衛生環境課の方とともに御坊市の一般廃棄物処理施設である御坊広域清掃センターを見学した。ここではゴミ収集車によって集められた一般ゴミや可燃性の粗大ゴミがどのように焼却されるのか、ダイオキシンが発生しないような工夫といった公害防止や環境保全の観点からなされていることを伺った。

12：50～15：20 美浜町・いきいき百歳体操の見学と体験

所長と美浜町役場の担当の方とともに美浜町において週 1 回行われている一般介護予防事業の 1 つである「いきいき百歳体操～地域に根ざした介護予防事業の展開～」に参加させていただき、実際に体操を行うことで地域の高齢者の方と交流した。この体操は手首や足首におもりをつけながら行うことで筋力がつき、寝たきりになることを防ぐなどといったことができるようになるものであった。

15：40～16：20 総括

保健所が地域の中でどのような役割を担っているのか、地元の医師と協力する重要性、保健所長になるためにはどのような要件を満たしている必要があるのかなどを所長から伺った。

3. 考察

今回の研修では実際に地域住民の生活を支えている場を見学させていただき、どのようなことがなされているのかを学ぶ貴重な時間であった。御坊広域清掃センターでは単に集められたゴミを焼却するだけでなく公害対策など地域住民の生活に害を与えないような工夫が至ると

ころになされていて、当たり前であると思ってしまう存在の重要性について学ぶことができた。1つ印象的であったこととして、金属といった不燃物が含まれていれば集められて埋め立て処理場に送られるということを伺ったが、これはゴミを捨てる地域住民が気をつけることによって省くことができるため、分別することがいかに重要であるかを改めて知った。また、いきいき百歳体操は地域の高齢者が健康に長生きできるようにするととても大切な取り組みであると分かった。見学させていただいたのはいきいき百歳体操を週1回行っている地区であったが、他には腰痛予防サークルや認知症予防サークルといったものがあり、地域全体で高齢者の健康を守る取り組みがたくさんあることを学んだ。高齢者が増加している中で、地域の高齢者の健康を1人1人管理することは困難であるが、重要なことであるため、美浜町のような取り組みが他の地域においても必要であると感じた。

4. 謝辞

今回の研修では保健所の役割や地域住民の健康を守る取り組みなど様々なことを学ぶ有意義な機会となりました。今回学んだことを胸にとどめ、これからも勉学に励み、将来地域の方々の健康を守る立場に立ったときに活かしていきたいと思えます。お忙しい中、このような貴重な時間を与えてくださりありがとうございました。

参考

日高振興局健康福祉部 <https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/130500/kenkou/>
 和歌山県ホームページ 和歌山県における高齢化の状況
<https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/040300/siryu/index.html>

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠1年生

西村 加奈

1. 研修施設とその地域の概要

御坊保健所は、御坊市、美浜町、日高町、由良町、印南町、日高川町を管轄している。その面積は579.02km²。総人口は63603人。御坊保健所では、総務健康安全課、保健福祉課、衛生環境課の部署に分かれており、それぞれに事務内容が分担されている。医師や薬剤師など各分野の専門知識を持つ方々や保健所の業務を行う方々が、地域住民の健康の保持・増進に取り組んでいる。

2. 研修内容

9:00 ~ 9:30 朝礼・オリエンテーション

朝礼では、形部所長と共に各課を回り、挨拶をさせていただいた。オリエンテーションでは、形部所長が今回の研修のスケジュールや御坊保健所の地域における役割などについて説明してくださった。

9:30 ~ 10:00 移動

10:00 ~ 11:30 御坊広域清掃センター・御坊クリーンセンター見学

ごみの焼却方法などについての説明を受けた後、施設内を見学させてもらった。

御坊広域清掃センターは、御坊市、由良町、日高町、美浜町、川辺町、印南町、中津村、美山村の1市5町2村から出た廃棄物を処理する施設である。ごみの焼却によって排出されるダストや有害ガスを含んだ高温のガスが施設外に出ていかないよう、様々な工夫が施されていた。温度調節によってダイオキシンや塩化水素などの有害ガスの発生を抑制することができるそうだ。また、周辺地域への影響を考慮して、臭気対策や騒音・振動対策も施されていた。清掃センターの努力や工夫があるからこそ、地域の住民は快適に暮らしていけるのだと感じた。

11:30 ~ 12:00 移動

12:00 ~ 12:40 昼食

12:40 ~ 13:00 移動

13:00 ~ 15:20 美浜町・いきいき百歳体操見学

美浜町でお年寄りの方を対象として週に1回行われている「いきいき百歳体操」に参加させてもらい、地域の方々と交流させてもらった。

いきいき百歳体操は、平成28年から始まった体操であり、現在この地域では15カ所で開催されている。いきいき百歳体操では、椅子に腰をかけ準備体操・筋力運動・整理体操の3つの運動をする。調節可能な重りを手首や足首に巻き付け、ゆっくりと手足を動かしていき、筋力の低下を防ぐそうだ。

15:20 ~ 15:40 移動

15:40 ~ 16:20 総括

形部所長が地域保健や公衆衛生医師の役割について説明してくださった。

3. 考察

保健所とはどのような役割を果たしている機関なのか今まで全く知らなかったが、今回の研修を経て、広域的・専門的かつ技術的なサービスを実施し、地域住民の健康や衛生を支える公的機関の1つであると知った。保健所には医師や薬剤師、放射線技師など様々な医療職種の人がいるため、チームワークを要する機関だと思った。

御坊広域清掃センター・御坊クリーンセンターでは、ごみ・し尿処理の必要性や重要性を学ぶことができた。私たちがごみ処理によって排出される有害ガスに侵されることなく快適に暮らしているのは、清掃センター・クリーンセンターの工夫があるからだと思わせてもらい、改めて感じた。地域のごみ処理に少しでも協力できるよう、ごみの分別など小さなことから努めていきたい。

「いきいき百歳体操」はラジオ体操ほども激しくなく、気軽にできる運動で、健康促進や運動機能の維持には大変効果的であるように感じた。重りの重さを自由に変えられることから、人それぞれ自分にあった運動強度に調節できることも良い点であると感じた。また、地域の人々が交流できる場にもなり、認知症予防や日々のちょっとした楽しみにもなるのではないかなと思った。こうした取り組みが今後健康寿命を延ばすためにもますます重要視されるようになってくるのではないだろうか。

4. 謝辞

形部所長、御坊保健所の皆様、御坊広域清掃センターの皆様、美浜町地域包括支援センターの皆様、いきいき百歳体操を教えてくださいました美浜町住民の皆様、お忙しい中丁寧に教えていただきありがとうございました。今回学ばせていただいたことを胸に留め、今後の学習や生活に生かしていきたいと思えます。

貴重な時間を本当にありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療科 1 年生

山路 千咲

1. 研修施設とその地域の概要

御坊保健所は、御坊市、美浜町、日高町、由良町、印南町、日高川町を管轄しており、その面積は 579.02km² であり、総人口は 63,603 人である。医師や薬剤師、獣医師、保健師など各分野の専門知識を持つ方々や保健所の業務を行う方々が、地域住民の健康の保持、増進に取り組んでおり、地域保健における広域的、専門的かつ技術的拠点となっている。

2. 研修内容

9:00～ 9:30 朝礼・オリエンテーション

9:30～10:00 移動

10:00～11:30 御坊広域清掃センター・御坊クリーンセンター見学

御坊広域清掃センター・御坊クリーンセンターでの見学を通して、ごみ・し尿処理の必要性

や重要性について学んだ。ごみの焼却によって発生するガスは、高温でありダストや有害ガスを含んでいる。これらの人や動物に悪影響を与える物質を排出することを防ぐためにゴミ焼却施設は設計されている。ここでは日高川の水を使用して、約 900℃ものガスを冷却している。さらに、最もダイオキシンが発生しやすい温度が 200℃であり、その温度を一気に通り過ぎるように冷却することでその発生を抑えている。また、冷却されたガスに噴霧される消石灰がダストと共に濾過層を形成することによって有害ガスを除去することが可能となっている。加えて、施設外へ臭いが漏れることを防ぐため、ごみピット室の臭気は送風機で吸収して焼却炉へ送り、炉内で燃焼脱臭されている。

11:30～12:00 移動

12:00～12:30 昼食

12:30～12:50 移動

12:50～15:20 美浜町・いきいき百歳体操

美浜町で行われている「いきいき百歳体操」に参加した。この取り組みは平成 28 年から開始され、この地域では現在 15 か所で行われている。この体操は、椅子を使用した準備体操・筋力体操・整理体操の 3 つで構成されており、特に筋力体操ではゆっくりとした動作に加え、手首や足首に調節可能な重りをつける。この取り組みは週に 1 回行われており、体操を続けると筋力がつき、身体が軽くなるので動くことが楽になるなどの効果がある。

15:20～15:40 移動

15:40～16:20 総括

3. 考察

ごみ処理によって排出される有害ガスから人々の健康を守ることができるよう、工夫されているということがよく分かった。この施設では主に可燃ごみを処理しているが、可燃ごみの中には不燃ごみが一日一トンも混ざっており、可燃ごみの処理場に入ってしまった不燃ごみは埋め立てるしか処理方法がなくなってしまうそうである。クリーンセンターは私たちの生活を支えてくれていることから、少しでもこの取り組みに協力できるよう、ごみの分別や洗浄などに取り組むべきであると考えられる。

「いきいき百歳体操」で使われる重りは調節可能であるので、その人にあわせた運動ができることがこの体操の良い点である。また、1つ1つの運動に、日常における動作に必要な部位の筋力を上げると言う目標があることも優れている点の1つである。実際に取り組みが始まってから半年で、5m 歩行の記録が早くなったなどの効果が見られている。加えて、地域の方々が集まって体操をすることで、運動をする機会ができるだけでなく、社会参加という点でも健康に効果があると考えられる。今回の研修で出会えた地域の方々もとても明るく、笑顔な方が多い印象があった。他にも様々な教室や取り組みが行われていることが分かり、自分の地域では

どのような活動が行われているのかを知りたいと感じた。

保健所では、医療と介護、開業医と病院の連携を支えたり、健康被害の発生予防・拡大防止・治療などの健康危機管理を行い、地域住民の健康を守っている。また、保健所は人が大勢集まる施設などを建設する際や、医師などの資格獲得に許可を出す役割も担っている。さらに、住民が体調不良で尋ねてきたときのために診察室やX線室も備え付けられている。このように、保健所はそれぞれの地域において大変重要な施設であることが分かった。

4. 謝辞

今回の研修でお忙しい中、丁寧に保健所や施設について教えてくださった、形部保健所長をはじめ多くの方々に深く感謝申し上げます。これまで、保健所が具体的にどのようなことを行っている施設であるかを知らなかったので、様々なお話を聞き、実際に体験することで、保健所についての知識を身につけることができました。今回の経験を生かし、地域に貢献できるような医師になれるように励みたいと思います。

6 田辺保健所



位 置 和歌山県田辺市朝日ヶ丘 23 - 1

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠 2 年生

塩塚 諒

1. 研修地域の概要

田辺保健所が管轄しているのは、田辺市、みなべ町、上富田町、白浜町、すさみ町の 1 市 4 町である。面積は 1580 平方キロメートルで和歌山県全体の約 33% を占めている。気候は本州の最南端に近く、黒潮の影響を受け年間を通じて温暖であり、比較的雨量も多い。管内では農林水産業が盛んで、特に梅の生産は日本一である。また観光地としても古くから有名で、リアス式海岸の変化にとんだ海岸美と、紀州・木の国の森林で知られる街並みを背景に、本宮温泉郷、白浜温泉、椿温泉、竜神温泉をはじめ、南部梅林・田辺梅林の観梅、海・山・川のフィッシングやキャンプ等アウトドアスポーツが盛んで、年間を通して観光客でにぎわっている。

2. 研修内容

9:00～9:30 挨拶、オリエンテーション、保健所施設の見学

9:30～11:00 クリニック見学

11:00～11:45 各課の業務の説明

13:00～15:30 生活保護世帯の訪問

15:30～16:40 三段壁自殺予防パトロール

16:40～17:00 総括

3. 考察

今回の研修においてもっとも学びたいと考えていたのは、昨年見学させていただいた和歌山市保健所と田辺保健所ではどのように役割が違うのかということであった。結果としては、広い意味で考えるとそこまで大きな違いがあるというわけではなかった。しかし、全く同じというわけではもちろんなく、まず研修が始まり最初に気づいたこととしては、保健所内にクリニックが存在し、患者さんの経過が良好であるかを定期的にチェックしているということだ。田辺保健所での研修を通して、地域の人一人ひとりと密接に関係性を持っているという印象だった。そして生活保護世帯の訪問や三段壁自殺予防パトロールを通して、地域の高齢化の現状を知ることができた。これから地域で働く私たちにとっては今回の研修での経験は非常に有益であった。

4. 謝辞

最後になりましたが、今回の地域医療研修を行うにあたり有意義な研修の場を用意して下さった先生方、充実した計画を企画して下さった田辺保健所の先生、スタッフの皆様に心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠1年生

山下 光

1. 研修施設とその地域について

研修施設として、田辺保健所へ研修に行った。田辺保健所は、総務健康安全課、保健福祉課、衛生環境課の3つの課に分けられる。総務健康安全課では、生活保護の適切な実施や災害時における支援を行っている。保健福祉課では、生活習慣病予防のための健康づくりの促進を行っている。衛生環境課では、食中毒の未然防止や自然環境の保護を行っている。

2. 研修内容

午前中は、保健所内の様々な部署を見学した後、クリニックを1時間半ほど見学させていただいた。クリニックでは、定期健康診断、管理検診、接触者健康診断の主に3種類の診察を行っていた。その後、保健所は実際にどのようなことをしているのかといった、施設についての話を聞かせていただき、午前は終了した。

午後からは、生活保護の見学と三歳児検診の見学のどちらか一つを行い、私は三歳児検診の見学をさせていただいた。そこでは、問診、診察、視覚検査、聴覚検査、栄養指導が行われていた。今回は、そのうち問診と診察を主に見学した。

最後に、研修について感じたことを情報共有して、研修は終了した。

3. 考察

今回の研修では、保健所の役割や病院との連携を学ばせていただいた。クリニックでは、普段目にしない管理検診と接触者健康診断を実際に見ることができた。血液検査やレントゲンなど診察方法としては一般的な診察と大きく異なることはなかったが、何より気軽に診察に行くことができる点が、保健所の良さだと感じた。実際にカルテを見せていただいて、患者の情報が書かれていたり、診察の聞く項目なども見せていただいた。

三歳児検診における問診、診察では、三歳児は第一反抗期と言われるように、元気な子から急に泣き出す子、全く喋らない子など様々だった。それに対して、医師や保健師はそれぞれの子の性格に合った話し方をされていて、実際に全く喋らなかった子が笑顔で話すようになることも多くあった。将来、医師となる立場から、三歳児に限らず患者一人一人の性格に対応した接し方をしなければいけないと実感した。

今回の研修で、行政における医療を学ぶことができ、とてもいい経験になった。この経験を忘れず、これからの学生生活を送っていきたいと思う。

4. 謝辞

今回、このような機会を与えていただきありがとうございました。保健所がどのような場所であるか、また、保健所の必要性について地域連携の面から学ぶことができました。今回学んだことをぜひ、これからの活かしていきたいと思います。

7 新宮保健所



位 置 和歌山県新宮市緑ヶ丘2丁目4-8

和歌山県立医科大学医学部地域医療科2年生

高橋 文太

研修施設とその地域概要

今回研修させていただいた新宮保健所は、別名を東牟婁振興局健康福祉部といい、新宮に本所を、串本に支所が存在する。本所には総務健康安全課、保健福祉課、衛生環境課があり、支所には地域福祉課、保健環境課がある。池田所長は、橋本保健所から来られたそうである。管轄地域は新宮市、串本町、那智勝浦町、古座川町、太地町、北山村で構成されており、北山村は三重県と奈良県に囲まれた、飛び地である。総面積は922.45km²であり、2015年度現在の国勢調査における人口は73666人で、前回の2010年よりも7.79%も減少しており、また高齢化率は39.40%と、全国平均の26.60%を大きく上回っている。高齢化が進んでいくと思われるが、生産人口が急激に減少していくために、高齢者自体の数は増加しないと思われ、医療や介護の需要は頭打ちになると推測される。今回研修で訪れた新宮市は、和歌山県の南部、熊

野川の河口に位置する都市である。観光地は熊野速玉大社があり、紀伊山地の霊場と参詣道は世界遺産に登録されている。気候区分は太平洋側気候に属し、温暖であるが雨が多く台風銀座として知られている。医療関連では、新宮市立医療センターが存在する。

研修内容

午前中は、現在休診中の小児科医さんの方の下でお話を伺った。人生には複数の選択があって、その選択が一つでも違えば先生は新宮で開業医を続けていなかったらという言葉は感慨深いものだった。

午後からは、池田所長と午前中の訪問と関連して医師不足の問題を掘り下げたり、学生間で感染症の集団感染についての事例について話し合ったり、新宮保健医療区のハザードマップを見ながら災害・医療について想定され得る問題点を提供してもらった。

考察

前回の研修では、保健所がどのような役割をなしているのかについて実際に現地視察という形式を通して見学していった。今回の研修では、池田所長の元で保健所のなすべき役割であったり、和歌山県または新宮のような地域における医師問題であったりを考える機会を提供してもらった形式であった。和歌山県でも過疎地域において医師不足が叫ばれているが、実際には和歌山県の多くの地域で人口対医師数は全国平均を上回っており、新宮保健医療区でも平均をわずかに下回る程度である。また、今回お話を伺った先生が現役で仕事をしていた時代は、本医療区では3人の小児科医で維持できていたという話を聞いており、医師不足が医師確保によって解消される単純な問題とはいえないと思った。また、本保健医療圏における災害への対処、今後高確率で発生すると予期されている南海トラフが起こった際に、津波からの避難に役立つハザードマップを見せて頂いたが、避難経路と災害救助がとても深刻な問題であると思った。というのも、地域規模での広範囲な水没が想定されており、高齢化が進んでいるので避難そのものが困難であり、また主要な幹線道路の水没や倒壊が予測され、救急車による負傷者の搬送やトラックによる物資輸送は難しいとされ、空輸による限られた救助に頼るほかなく、無事に地震をしのいだとしてもその後の、医療やその後の生活を維持することは難しいだろう。

謝辞

今回の研修では、保健所と医療の在り方について色々考えさせられました。保健所研修は今回で最後となりましたが、今後地域医療を担う地域枠の身として、コメディカルとして連携していく保健所について知識が深まったと思います。このような機会を提供して下さった池田所長をはじめ、保健所職員の方々、小児科医さん、地域医療支援センターの先生方に深く感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

1. 研修施設とその地域の概要

新宮保健所は新宮市に位置しており、その管轄区域は新宮市、那智勝浦町、串本町、太地町、古座川町、北山村である。管轄区域内の総人口は約7万人であり、和歌山県の人口の約7.2%を占めている。また、気候は温暖であるが雨が多く、台風の通過も多い。そして、管内には世界遺産に登録されている熊野三山の熊野那智大社と熊野速玉神社があり、海外からの観光客も増加している。

2. 研修内容

まず、保健所で池田所長と軽く自己紹介を済ませた後、開業医である坂下先生の病院に伺い、お話を聞かせていただいた。内容としては、坂下先生の人生について、そして医師としての心得である。お話の中で最も印象深かった言葉は、「チャンスはいつも目の前にある。それを取るか取らないかは自分次第。」である。また、人生にはいくつもの分岐点があり、そこでの選択によって人生が変わると教えていただいた。例えば、坂下先生の場合、進学する大学や診療科の選択などである。それから、医師になってからの経験や開業するまでの経緯を伺った。午前中に坂下先生のお話を聞いた後、保健所に戻り昼休憩をとった。

午後から、池田所長に和歌山の医療の現状についてお聞きした。池田所長によると和歌山県は医師不足であると言われているが、人口に対する医師の割合は全国的に見ても高いそうである。和歌山市に限ると全国の市町村の中で3位である。そして、この現状をどう見るかの意見を問われた。その次に、保健所の仕事の演習として、障がい者施設における下痢症集団発生事例を想定した。その演習の中で、保健所の所長としてどのような判断をするのが適切なのか、このような事例が起こった場合、保健所がどのような対応をするのかを学んだ。最後に、南海トラフ地震が起こった際の被害想定について話し合った。このように南海トラフ地震対策も保健所の仕事の一つである。そして、その被害想定によると新宮保健所管轄内の串本町では甚大な被害を受ける。串本町では海に面しているため幹線道路が津波により通行止になると予想される。そうすると、陸から救助に向かうことができない。これは、新宮市にも言えることである。すると、ヘリコプターで救助してもらえないのだが、太平洋沿岸部のどこも被害を受けているので新宮市にヘリコプターが来るのかわからない。そして、別の問題として、重傷者を受け入れられる病院が無いということがある。想定される重傷者数だと、今の病床数では足りない。この問題をどう解決していくのかについて話し合い、研修は終了した。

3. 考察

今回の研修まで、保健所という役所がどのような仕事をしているのか知らなかった。そのため、今回の研修は私にとって大変勉強になった。保健所は、特定の症状が集団発生した場合の対応や、

南海トラフ地震の想定など、答えのない課題に対して答えを出すことを要求されるものであると感じた。公衆衛生から防災まで、その地域において保健所がどれほど重要な役割を果たしているのかを肌で感じた。坂下先生のお話や、池田所長のお話を聞いて、現在医師不足と言われている和歌山県だが、それは医師の働き方が変わってきたからであると考えられる。坂下先生のお話や、和歌山県の現状を聞いて医師としてのあり方や自分の将来について改めて考えさせられた。自分が医師として和歌山県のためにできることは何か考える良い機会になったと感じる。

4. 謝辞

最後になりましたが、私たちのために今回の素晴らしい研修を企画してくれた先生方、そして池田所長をはじめとする新宮保健所の皆さん、お話を聞かせてくれた坂下先生、お忙しい中、ありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療科 1 年生

瀧脇 颯太

1. 研修施設とその地域の概要

今回、研修で行かせて頂いたのは新宮駅から徒歩 20 分程にある新宮保健所（東牟婁振興局健康福祉部）である。新宮保健所の管轄区域は新宮市、那智勝浦町、太地町、古座川町、北山村、串本町である。新宮保健所の管轄区域は多くが海に面しているため、南海トラフへの対策がとても重要視される地域である。役割としては、献血や健康相談、エイズ検査などの身近なことに加え、現在直面しているもしくは今後直面するであろう医療問題の解決に努めることである。

2. 研修内容

初めに、新宮保健所の管轄区域や新宮保健所が行っていることなどを伺った。その後、車で坂下小児科へ伺い、新宮市の人々を長年支えておられた小児科の坂下先生にお話を伺った。内容としては、坂下先生が医師を目指したきっかけ、坂下先生が小児科として働いてこられた中で経験したことや感じたこと、開業医として働く上での実情など大変勉強になる話をして頂いた。そして、お昼休憩を挟んだ後、再び新宮保健所に戻り和歌山県の医師不足の現状を実際の統計と共に教えて頂いた。その後、障害者施設での感染症の流行を想定した事例を用いて、状況に応じた適切な対処法を考えるなど演習を通してながら保健所で実際に行っていることに触れた。最後に、近い将来訪れるであろう南海トラフについて、南海トラフが来た場合に現在想定されている被害や南海トラフに対する実情を教えて頂き、それを受けてどのようにすればできるだけ多くの人を救えるのかを考えた。

3. 考察

今回の研修で1番印象に残っているのは、坂下先生から伺った話である。坂下先生の時の医療現場と私が思い描いている現在の医療現場とが全く異なっており、数十年前の医師の働き方にすごく驚いた。最近、よく医師不足が問題視されているが坂下先生が働いていた時と比べるとかなり改善されてきており、医師の働き方もかなりよくなってきているということを実感した。坂下先生は1日に200人を診るようなときもあったとおっしゃられていたが、そのような時代に地域の人々を支えていた医師の方々の存在があって今の私たちがあるので今度は私たちが次の世代につなげていけるように今は学習に励んでいきたい。

また、現在想定されている南海トラフの被害について教えていただいたときのこともすごく印象に残っている。私は海とは遠いところに住んでいるため、これまで津波に対して危機感は全く感じていなかった。しかし、今回実際に想定されている被害範囲や死者数をみせていただき、南海トラフの恐ろしさを本当の意味で理解することができた。

4. 謝辞

最後になりましたが、お忙しい中貴重なお時間を割いて下さった新宮保健所の皆様、坂下小児科の坂下先生には大変お世話になりました。とても有意義な研修となりました。今回の保健所研修で学んだことを生かし今後の学生生活を過ごしていきたいと思えます。1日、本当にありがとうございました。

村田 七海

私は7月9日～8月29日までの50日間、海外基礎配属の一環でシンガポールの南洋理工大学 (NTU) に留学しました。配属先である Su I-Hsin 教授の研究室では免疫学を専門としており、私の入れていただいたチームはマクロファージにおけるミトコンドリア動態について研究していました。留学前の1か月間はほぼ毎日放課後に和医大の生体調節機構研究部へ通い免疫学研究に必要な手技を教えていただいたのですが、留学当初はほとんどの手技が「見たことはあって知っているけれど一人ではしたことがない」という状況でした。この留学を通して、最終的にはマウスから骨髄細胞を取り出し、培養してマクロファージまで育て、FACS 解析とライブイメージングを行うという一連の流れを一人で出来るようになりました。さらに実験結果のまとめ方や発表の仕方も見ても真似て学びました。実験以外の時間は実験の意義やミーティング内容、論文を理解するために調べものをしていました。Su I-Hsin Lab ではミーティングが頻繁に週に1～2回行われています。ミーティングの度に知らないことや理解できないことが沢山出てくるのでメモした専門用語や原理を調べ、調べても分からないことを質問し、質問しても理解できないことをまた自分で調べるといった繰り返しでした。研究室に日本人は私だけだったので英語に苦戦することも多々ありましたが、幸いラボメンバーの仲がとても良く、研究室の雰囲気は私にあっていたのでしんどいことがあっても悲観しすぎることなくあらゆることに挑戦できました。ペーパーディスカッションの一作を任せられ自分で選んだ論文について発表し一時間かけて議論したことは私にとって大きな挑戦でありとても印象に残っています。はじめは論文を一つ読むのにも苦戦していたのですが、留学期間中に沢山の論文に触れることで次第に慣れ、少しずつ早く読めるようになりました。

また、私は週に一度シンガポールにある知的障害児むけの特別支援学校 MINDS でボランティアをしていました。The Movement for the Intellectually Disabled of Singapore (MINDS) は1962年に設立された団体でシンガポールの知的障害者支援において最も歴史があり最大規模の NGO です。私は和歌山の障害児放課後デイサービスでアルバイトをしていたことがありますが、MINDS のような大きな支援学校にかかわるのは初めてで、どう職員の事務作業が効率化され、多数のクラスをやり繰りしているのか興味がありました。私は様々なクラスで先生の補助や教材づくりをさせて頂くなかで、特別なテクノロジーを導入しているわけではなく、教材をラミネートして四角に切り、さらに角を丸く切り落とすなどといったボランティアの地道な作業によって支えられているのだと痛感しました。また、ボランティアを行う人々が日本に比べてとても多いことに驚きました。ほとんどの学校でボランティア活動が単位として認められるので休日に子供を連れて家族でフードバンクに行きボランティアをする家庭もあります。

休日は観光地へ足を延ばし散策していました。シンガポールはアジアの縮図、ひいては世界

の縮図と言われるほど、文化や民族が混ざり合っています。隣国のマレー系、中華系、インド系を始め、イギリス植民地時代に労働者として滞在していたタミール系やアラブ系などの民族がシンガポールに滞在しており、さらに労働人口の3分の1が外国人労働者です。国が小さく様々な文化が密集しているので歩いているとアラブストリートやリトルインディアなどに出逢い、各々の独特な街並みに浸ることができます。後半になるとシンガポールで出来た友人たちと映画を見に行ったり、ラボメンバーと自然公園へ行ったり、現地の人々と日常の休日を過ごしリフレッシュしていました。

私がこの留学をしてよかったと思うことは主に2つあります。1つ目は、好奇心のままに勉強できたことです。日本のように手取り足取り教えてくれるわけではないので、積極的に自学自習ししがみついていくなかで、思考体力が鍛えられ疑問を突き詰めていくことができました。また困ったことがあれば和医大の免疫学の教授がいつでもメールで相談にのってくださり、論文を読む際も「何故そうなるのか」ということをとことん議論できました。日本でいる時とは違い、テストに追われることなく、放課後にアルバイトや部活動もなく、時間的に余裕があったので勉強に集中できました。2つ目は日本とシンガポールの違いから視座を高められたことです。ボランティアを通してシンガポールで活躍する日本人の医療従事者の方々と知り合い、保険制度や医療体制の違いなども教えて頂きました。さらに休日現地の人々を過ごし多様な文化を知ることによって考え方の違いなども実感しました。貴重な留学の機会を頂けたことに感謝しながらシンガポールで吸収してきたことを活かし今後の学生生活をより充実させていきたいと思っています。



ホームページ・ <http://www.cmsc.jp/>



Facebook・ <https://www.facebook.com/W.CMSC>

和歌山県立医科大学地域医療支援センター



和歌山県立医科大学 地域医療支援センター

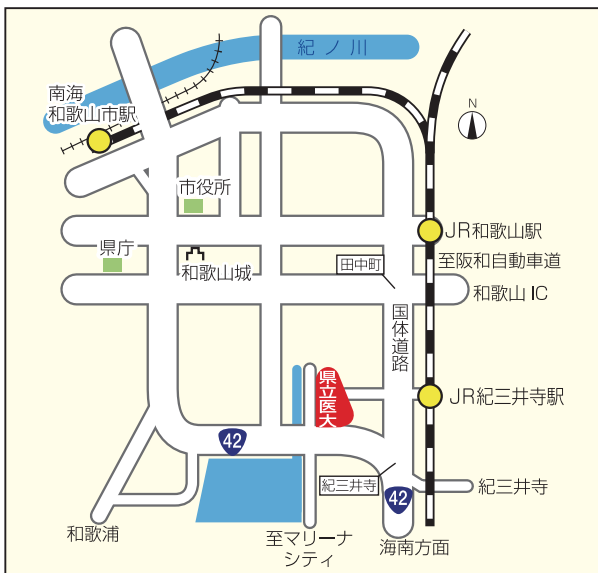
〒641-8509

和歌山市紀三井寺811番地 1

TEL: 073-441-0845

FAX: 073-441-0846

アクセス方法



- JR 紀三井寺駅 → 徒歩 (約 10 分)
- JR 和歌山駅 → バス・タクシー
- 南海和歌山市駅 → バス・タクシー

- JR 和歌山駅前
 - 1 番のりば「医大病院」行 約 25 分
 - 2 番のりば「医大病院」行 約 30 分

- 南海和歌山市駅前
 - 1 番のりば「医大病院」行 約 30 分
 - 8 番のりば「医大病院」行 約 30 分
 - 9 番のりば「医大病院」行 約 30 分

令和元年 11 月発行

発行 和歌山県立医科大学 地域医療支援センター センター長・教授
和歌山県地域医療支援センター センター長

上野 雅巳